

コードギアス反逆のル ルーシュ Revenant

Ned

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

ブラックリベリオン・黒の騎士団の敗北からから一年。仮面の魔人の復活が着実に近づいている中、もう一人の王が目覚めようとしていた。

人知れず消えた白銀の王が——…

目次

T U R N 1 R e v e n a n t

1

T U R N 2 旧友 | 15

T U R N 3 剣と約束 | 29

T U R N 4 蒼紅の騎士 | 53

T U R N 5 矛盾 | 66

T U R N 6 ピースマーク | 85

TURN 1 Revenant

私は無力だ。

八年前——世界が光を失った。

手を伸ばそうとしても真つ暗な闇。何も掴めず、虚空を彷徨う自分の手すら見えな
い。

確か事は背中に当たるベットの感触だけ。

力を入れて身体を起こそうと試みる。

闇の中でも己の両脚は存在しているということくらいは理解できた。

それでも——動かない。

以前と同じようにはなく、もつと集中して。意識しながら両脚に念じる。

動いて、動いてよ、動け……っ！

しかし、いくら念じようとも。何度願おうともぴくりとも反応を返してくれない。

そもそも、どうやって脚を動かしていたのかすら忘れてしまった。

膝下から先は自分にもではなくなってしまうた。

そんな錯覚すら脳裏に浮かんで心の底から恐怖した。

その瞬間が初めてだろう。

私は世界に絶望した。

誰かの手を借りることではしか満足に日々の生活を送ることも叶わず、常に誰かの手を煩わせて。

辛いこと、哀しいこと、見たくないこと、聞きたくないことを全部他人に押し付けて
…守ってもらって。

そうすることでその人達は擦り切れて、傷ついていった。

どうしてそんなに簡単なことに気付かなかつたのだろう。

そうすることで私が出来る事だつてあつたのかもしれない。

自身が置かれているこの状況だつて、変えられたかもしれないのに……。

我儘な自分。幼い頃のように目覚めた瞬間の恐怖で泣き散らす事は無くなった。

だが、依然として変えられたかもしれないなんて、きつとできもしなかつたくせに、そんなものもを考えている時点ですべても傲慢だ。

こんなにも我儘な娘だから、きつと王子様は目の前に現れてくれず、記憶の中にも存在しない。

せめて眠っている間だけならと、恋に憧れる少女の夢の中にしか出てこないの
う。

王子様と言っても名前も知らず、なんとなくそんな呼び方が納得いつてしまうような幻に過ぎない。

記憶喪失で、優しい。お兄様と似た雰囲気王子様。

メルヘンチック過ぎると自分でも少し恥ずかしくなるが、それ以外に例えようがない。

まるで自分の理想を形にしたかのような人物だから、やはり実在はしないのだろうと諦めている節はある。

だけど、本当は触れられるくらい近くにいて、ずっと傍から見守ってくれていたのではないか——そんな風に思えて。

なのにどうしてか、突然消えてしまつて——。

折り紙と一緒に折つた時間がありません。

記憶喪失だというのにどうしてか、彼はとても紙の扱いが上手で。

何故か折れてしまったと不思議そうな彼の表情はきつと可愛らしかったのでしょう。触つた感触で伝わる花の形。

——桜の花だ、と言いました。

ちゃんと折り方を覚えていきます。唯一形の残るものだから、あなたとの繋がりを信じて。

アツシユフオード学園の中庭でデートしたこともありました。

咲世子さんが作ってくれたお弁当を食べさせてくれた事もあった。

羞恥の気持ちで胸が裂けるほど一杯になって、だけど、それを上回った喜びの感情が強くて……。

自分も普通の少女と同じ青春の時間を過ごしていると実感できたから。

学園の屋上へと私を抱えてくれた思い出もあります。

あの空間の風は何だか他の場所とは違うような気がして好きでした。

心地の良い風の涼しさ、伝わる体温と心音に浸っていた愛おしい時間。

全て本当に夢なのでしょうか？

年頃の少女的な妄想に憧れた結果の患いですか？

だとしたら私は……。

あなたの顔は知りません。だって私の目は開かないから。

でも、本当に不思議で……夢の中でのならはつきりとあなたの声と足音なら覚えていきます。

あなたの名を叫ぼうとしても喉奥が詰まって出てこない。

知っている筈。本当はとても大切な名前なのに……思い出せないのに何故でしょう。

ねえ、誰ならこの答えを教えてくださいか。

教えてください。折り紙を折り終わる度に流れる涙の理由わけと慰めてくれる筈の誰かを。

あなたは今、どこにいるのですか——。



広々とした空間に見渡す限りの人の群れ。神聖ブリタニア帝国帝都ペンドラゴンの謁見の間においてもこれだけの人間が一堂に介す事は稀である。

かつ各々が絢爛に着飾った大企業のCEOや地方に領地を持つ有力貴族から、政府首脳陣などの高級官僚たち。

第一皇子オデュッセウス、第一皇女ギネヴィア、第五皇女カリーヌ。そして宰相を務める第二皇子シュナイゼルまでも含んだ皇族。

果てには帝国最強の十三騎士——ナイトオブブラウンズまでが勢揃いしている。

ブリタニア帝国の中枢に座る者たちが勢揃いした光景。それは最早異常を通り越して異質とも言えるかもしれない。

帝国において最も皇帝に近いとされる第二皇子が宰相権限を行使したとしても、ここまでブリタニア帝国において権威を持つ人間を寄り集める事は困難である。

ならば、当然。それ以上の権力を持つ人間でしか、この式典を実行することが出来ない。だとすれば該当する人間は一人しか有りえない。

「皇帝陛下、ご入来！」

皇帝直属の警護隊を務める衛士の一声に人々が神妙にかしこまる。

金箔で装飾され仰々しく配置された荘厳な玉座、その背後にある通路から規則正しくも力強い足音が響く。

圧倒的な威圧感を伴って現れたのは老齡の男。

証として巻かれた髪はかつての色を失くし白く変色している。しかし、その長大な体軀は岩盤の如く些かの揺らぎなく、衰えを感じさせない。

鷹のそれを連想させる眼光は歴戦の猛者であろうとも縮む程に鋭く、拝謁する者総てを射抜く。

現時点においてその玉座に座することを許された唯一無二の人間。

神聖ブリタニア帝国第98代皇帝、シャルル・ジ・ブリタニア。

「不平等においてこそ競争と進化が生まれる」という持論を国是とし、97代皇帝までの腐敗しきった政治、困窮していた経済を即位してから驚異的な速度で回復させた立役者にして稀代の怪物。

その背景には他国への介入行為及び侵略行為も由とする弱肉強食な実力主義。

歴史に刻まれた伝説：時の皇帝によって誇らしく、そして忌むべきとも云われるブリタニアの系譜の再現。

他国の領土を侵略し自国を強固とし、今ではその名すら口に出すことを憚られる程恐れ讃えられた辺境の王。その生まれ変わり、再来とも呼ばれていた。

「——今より新たなナイトオブラウンズを任命する」

重い口から低く厚みのある声が放たれる。

——参れ。その一言を待っていたのだろう。

集結した内の一人がなんの躊躇いもなく、皇帝の前へと躍り出る。

そして、この場における全ての瞳に姿を現した。

「……うつ」

誰かが呻いた。それはただ一人。

あまりにも大勢の人々故に特定こそされなかったものの静まり返った空間では嫌で

も響いた。

だが、声を漏らさずとも反応は各々個性があつた。

それを目にした瞬間に顔を背ける者。

その姿に畏怖とも恐怖とも言えるものを感じ固唾を呑む者。

何かの余興かと冗談めいた嘲笑の表情を向ける者。

ナイトオブラウンズの面々においてはまるで品定めをするかのような瞳で同輩となる人物を眺めていた。

まず目を惹くのはくすんだ灰色で、くせのついた銀の髪。

瞳の色は青空を映したかのような蒼。

背丈はブリタニアの成人男性と同じくらいか少し低い程度。おそらく性別は男性だろう。

ここまではいたって普通。別段顔を背けられる理由も恐怖を感じる所以も嘲笑を向けられる事はない。

一番の特徴が端的に異質過ぎた。

騎士候の装いの下には足先から口元まで地肌を覆い隠しているのは白い包帯。

まるで戦時中の負傷で入院中の患者がそのまま抜け出してきたかのような出で立ちをしていた。

その実、負傷者というのは間違っていない。

火傷、裂傷、弾傷など戦の激しさを物語るそれが包帯によって隠されたほぼ全身に刻まれている。

エリアー1——旧日本で活動していたテロ組織黒の騎士団。そして、その長たる人物——ゼロ。

少数勢力ながらもブリタニアに少なくない打撃を与え、苦汁を味わわせた彼らの行動は他国の反ブリタニア勢力にも影響しその活動を活発化を促した。

エリアー18は影響を大きく受けた勢力の一つである。

黒の騎士団の主戦力となっていたナイトメアフレームを開発していたインド軍区から支援を受けたこと。

自分たちの国を制圧した後にエリアー1へ向かったコーネリア・リ・ブリタニアの軍を何度も出し抜いたこと。

そして、何よりも恐怖を植え付け、「魔女」とまで呼称されたコーネリアが戦いの後失踪した事実がエリアー18の反ブリタニア勢力を活気づけていた。

ブリタニア軍が制圧して以降、指揮を執ったコーネリアはエリアー1へと移り、その後を任された総督が自らの功績でも無いくせに立場に甘え胡坐をかいた故の職務怠慢もあり、エリアー18の反乱の芽は着実に育っていた。

インドの支援と黒の騎士団の決起は彼らの勢いに拍車をかけ、在中しているブリタニア軍では手に余る状況にまで陥る中、ようやく戦況を重く見て本国へと増援要請した部隊の中にその男はいた。

「レヴニール・キングスレイ。

貴公を帝国最強の騎士ナイトオブラウンズ、その次席へと任ずる」

「光栄の極み。謹んでお受けいたします」

「E・Uで身罷ったマンフレデイの後任として、存分に励むがよい」

「——イエス・ユア・マジエステイ」

包帯越しのくぐもった声で返す——レヴニール・キングスレイはエリア18においての戦果、功績に対する正当な報酬としてナイトオブラウンズへと認められた。

ブリタニア本国からの増援により戦況は優位に立ちつつあり、後は敵司令部を叩くのみ。……その筈だった状況は一つのイレギュラーによって一変する。

内通者の手引きによって総督が暗殺。伴い指揮系統に乱れが生じ、総督府はテロリストに占拠され、エリア18最強の要害は敵の総司令部へと変貌した。

本来代理人となる副総督は人質となり、拷問された後に取引材料となることを恐れ、逃亡。

現場における指揮官たる将軍は優勢を崩され冷静な判断力を失い玉砕してこい、と言

わんばかりの無謀な命令を下すことしか出来なくなっていた。

混乱する戦場で無駄に命を散らせる上層部を見切り、派遣されたブリタニア軍の内部から独立した者たちがいた。

まだ二十になつたばかりの青年、それにも満たない少年たちが寄せ集まつて生まれた名も無き部隊。本来は実戦経験を積ませるために士官学校から卒業したばかりの兵卒たち。

その指揮を執つたのがレヴニール・キングスレイ。唯一実戦経験のある青年だった。彼を主導とした部隊はエリアー8へと来るまで実戦経験こそないが、士官学校を首席または次席で卒業した優秀な者たちばかりということもあり、戦場の理を身に着け着実に戦果を挙げていった。

それでも戦力的優位には圧倒的な差があることは事実であり、部隊の殉職者は増えることもまた当然。

未だ冷静になつていない元指揮官に司令部を攻撃する旨を一方的に伝え、遂に敵総司令部であつた総督府を攻撃を決行。

その時点で独立した直後よりも部隊員数は三分の一程に減つていた。

激しい抵抗に苦戦しながらも最終局面でようやく正気へと戻つた將軍の増援によつて、再び優位を得る事に成功。

総督府を奪還し、敵部隊を殲滅。エリア18を再平定することに成功する。

だが、生き残ったのは部隊でただ一人、主導していたレヴニールのみ。司令部に突入してからは限界が近かったナイトメアを降り、己の肉体での白兵戦となっていたという。

その際に全身に裂傷及び一生身体に残り続けるであろう火傷を負った。

任命式に呼ばれた人間であれば理解している事実。だとしても実際に目にする事はわけが違う。

フィクションとしてゴーストなどの存在を愉しむことはできても、実在すれば話は変わってくるのと同じ事だ。

本来ならば死ぬべきであった戦場からいくつも致命的な傷を負いながら帰還した男。

他国からは恐れられるが戦勝国においては正しく英雄と言えるだろう。

明瞭たるその事実を理解している者。ラウンズが一人にして名実ともに帝国最強の騎士、ナイトオブワン——ピスマルク・ヴァルトシュタインが厳格な表情を保ちながら、重々しく響く拍子で礼賛を送った。

続いてナイトオブスリー、ジノ・ヴァインベルグ。金髪碧眼の長身、絵にかいたようなブリタニアの美青年は新たな同輩を歓迎するかのように口元に笑みを浮かべながら陽気な軽い調子で。

ラウンズの二人がやるのなら……。と誰からでもなく叩かれた拍手。それを皮切りに大きさを増していく賛美の音。

陛下が認められた騎士ならば問題はないだろう。

また面白そうなやつが来たもんだなあ。今度手合わせでも誘ってみるか。

不気味な姿……。だが、それよりも凍てつく様な瞳が気になって仕方がない。

記録……は後で。

帝国最強の騎士たちが各々自分なりの評価を下している中、一人釈然としない表情をしていた。

ナイトオブセブン——枢木スザク。ナンバーズからラウンズへと昇りつめた男、亡きユーフェミア皇女の騎士。

(レヴニール・キングスレイ……。キングスレイという名字はブリタニアでは珍しいものではないのか……?)

脳裏に浮かぶ一人の姿。かつて唯一無二の親友で、ずっとそうなのだろうと信じてきた男。

誰よりも信じていた、俺たち二人がいれば不可能な事なんてない。そんな風に思い上がっていた自分に腹が立つ。

真の姿は嘘で塗り固められた仮面を纏った怪物だった。

信じたくもない事実を受け入れて、彼の父であり自らの主君である皇帝へと差し出した時、怪物が与えられた仮初めの人格と偽りの名。

——ジュリアス・キングスレイ。

元々隠し持っていた彼の尊大な性質がより強調され思春期の万能感が形を為したように見える、現実味のない男。

これは偶然なのか。それとも今莫大な賛美を受ける人間も皇帝の息がかかった者なのだろうか。

誰にも相談することは出来ず、誰からも答えは得られない。きっと彼をラウンズに任命した人物も「知る必要はない」と一蹴するに違いない。

「しっかし、レヴニールなんて面白い名前だ。

まるでキングスレイ卿の為に詠えたみたいじゃないか」

「?」 どういうことだい、ジノ」

ここそこそと耳元で囁いた友人の言葉に疑問が浮かんだ。

確かに珍しい名前だとは思いますがまるで詠えたとは一体どういう意味なのだろうか。

「あー、スザクは知らなくても無理ないか。……まあE. U. 圏の言葉なんだけどな」

「——再び来る。つて意味なんだとき」

TURN 2 旧友

「ナイトオブツアの専用ナイトメアを……私たちが？」

いくつもの蛇のようなケーブルが伸びたコンソールを忙しなく叩く女性が疑問の声を上げた。

年齢にして二十代半ば程。すらりとした細身だが決して肉付きは悪くない。

加えて藍色の髪が特徴的で知性的ながらも朗らかな笑みが似合う、温和な人となりだ。

本人が望めば女優はやモデルなど自身を魅せる職に就く事も不可能ではないだろう。当然、見目麗ことも彼女の魅力ではある。が、最たる長所といえばその頭脳だ。

庶務の多い立場であるが、旧・特別派遣嚮導技術部：現在はナイトオブセブン専用ナイトメア開発チーム『キヤメロット』の実質的なナンバーツーであり、科学者としても一流の頭脳と才能を有している。

試作嚮導兵器、第7世代ナイトメアフレーム、ランスロット。

エリアーにてコーネリア皇女を救い、単騎で何度も戦況を覆した上に最終的に黒の騎士団のトップであったゼロを捕らえた功績でラウンズとなった枢木スザクの機体。

ブリタニア帝国に第七世代ナイトメアがランスロット一機のみであった故もあるが、数ヶ月前まで世界最強と言っても過言ではないKMFを開発した一員であることが彼女の有能さを証明している。

だが、それを凌駕する頭脳の持ち主が此処に一人。

「そ。さつきまでナイトオブツールの任命祝典に出席してただけだね、任命式の後に手を挙げてきちちゃった」

「はあ、また何の考えもなしに……。その場の勢いですか？」

「残念でした。勢いだけじゃなくて打算もあるんだよねえ」

あははー、と眼鏡越しの瞳を細めて軽快に笑う男は毎日このような調子で部下たちのために息を吐かせている。

歴史上、天才と言われる人物は狂っているか、壊れている。

そんな古来より使いまわされてきた表現を人間の形にしたような存在がこの男であつた。

ナイトオブセブン直属開発機関・キャメロット主任、ロイド・アスプルンド。

彼こそランスロット開発を主導した研究者であり、生みの親とも言える。

人間的に壊れていると自覚している奇怪な人物。所以として、突発的で予想できない行動や言動は度々部下達を振り回し、立場が上の人間であつても例外はない。

それでも彼を科学者として尊敬の念を向ける者は多く、その集合体が旧特派であり現キヤメロットの研究員である。

自身の興味の為なら些末な事実などどうでもいいと言わんばかりに良くも悪くも見境がない。

ロイドが開発者でなければ騎士公でもない、ましてやナンバーズの少年をナイトメアに搭乗させることなど有りえなかつただろう。

「予算についてはシユナイゼル殿下と皇帝ちゃんが何とかしてくれるみたいだし。」

悪い話じゃあないと思うよ？」

「だからってラウンズの機体を二つも掛け持つなんて、周りからのバッシングとかあるんじゃないですか？」

「え、別にいいじゃんそんなの」

あつげらかんと真顔で言ってくれるが私たちは気にするのです!!……なんて声高に言つてやりたかつたがセシルは改めて思い知る。

——ああ、この人はそういう人間だったな。

忘れていたわけではないが周囲の評価や他人の感情に関する質問は愚問だった。

大学のゼミで同じ研究をしていただけで自分まで変人扱い。

特派時代も第二皇子シユナイゼルに目を掛けられていたという理由で苦言を呈され

たり、難癖をつけられたこともある。

そして、ロイドに相談すると決まって言うのだ。

「え、別にいいじゃんそんなの」

つい先程と全く同じ台詞を何度も何度も聞かされた覚えがある。

それでも尚、彼に対して人間性を重視した発言をするのはナンバースにも分け隔てなく接するセシルの優しさ故だろう。

壊れた天才科学者とその感情を補填する助手は示し合わせたように相性の良い。

だからこそロイドの元から部下は離れず、より良い結果を求め研究を続ける。

絶妙な塩梅のトップとナンバーツのコンビでカメラロットは成り立っていた。

「まあそれでも彼の正式な開発チームが発足するまでの繋ぎなんだけどね。」

でも今は悠長に新型ナイトメアを開発している状況じゃあないでしょ」

「それは……。そうかもしれないですけど、カメラロットだって正式ロールアウト前のヴァインセントくらいしかすぐに用意できませんよ?」

「何言ってるのセシルくん。あるじゃん、すぐに用意できてかつ超高性能なナイトメアが」

「え?…あつ、もしかして、あの機体のことですか?」

でも、あれは私たちの趣味に走り過ぎて、いくらラウンズの方でも乗りこなせるかは

……」

「その時はその時。彼の事は素直にジヴオン卿の方に任せることにするよ。

彼も自分とこのナイトメアを売りがつてたし」

なんて口では言っているものの、本心ではそんなつもりなど更々無い事は彼を知る者なら判る。

他人を理解していないように思われているが、ごく稀に鋭くのを得ている事を口に出すことがあるのだ。

その実ロイドは洞察力に長けていて、彼が見出した者は年齢、人種など統一性はないがやはり結果を出す。

逆に微塵も興味のない事柄については余程の権力的圧力をかけられるかセシルの鉄拳制裁でしか動かず、やる気の欠片も感じられない仕事としてこなすだけだ。

ロイド・アスプルンドという人間に興味を持たれたという時点で彼の言うナイトメアパーツとしての性能は保証されている。

そして、優秀なパーツが目の前に在るといふのにみすみす逃す男でもないし、抱えた後も離さない性質だ。

ナイトオブツ―専用開発チームが発足したとしても何かと理由をつけて整備改良は行い、ちやっぴり戦闘データも回収する算段は脳内で完成しているだろう。

本人は断固として拒絶するだろうが、もう少し人間性を身に着けさせ政治家でもやらせたら成功する可能性はあるかもしれない。

「でも、もしナイトオブツウがああ機体を乗りこなせる騎士だとしたら……」

「うん、戦場の理は一変するね。彼とアレが出撃した場合。」

何だか凄い面白いことになってきたね。——んふ、んふふふふふ」

——不気味な鼻息混じりの大笑が無機質な壁に囲われた軍需工廠内に嫌に響いた。



神聖ブリタニア帝国本土、キャリフォルニアに定在する機構軍需工廠ロングミアド
ファクトリー。

ナイトメアフレームから浮遊航空艦などの製造、整備、改良などブリタニア帝国軍需
産業の心臓部ともいえる工廠。

務める技術者ではない外部からの来訪として二人の若者が訪れていた。

絢爛な装飾はない。それでも、瞳に映した者を引き付ける色合いと意匠の外套を纏う

両人は当然、ただの若者でも大貴族子息でもない。

ナイトオブラウンズ——帝国最強の騎士。

その証たる外套を許された人間は本来十三人。だが、現代においては九人しか存在せず、欠番があった。

皇暦1997年5月6日に発生したブリタニア史上最大権力争いにしてクーデター、『血の紋章事件』が発生。

現皇帝シャルルに忠誠を誓ったはずのナイトオブラウンズ十一人のうち九人が候補生を連れ、離反。

シャルル派として残った当時のナイトオブファイブにして現ナイトオブワン、ビスマルク・ヴァルトシュタインと当時のナイトオブシックス、後の皇妃マリアンヌ・ヴィ・ブリタニアらによつて事件は終息したがこのうち六人は事件の中で謀殺、残る三人は処刑という結果となった。

この事件の影響は大きく、それまで皇帝直属の戦力として一大勢力を築き上げていたラウンズの組織規模が大幅に減衰。

ナイトオブワンを拝命する予定だったマリアンヌも皇妃へと迎えられた為、ラウンズは新たにナイトオブワンとなったビスマルクのみという状態がしばらくの間続いていたという。

現在も欠番こそあれどそれでも組織力、他国への抑止力としての機能を回復しつつある。

加えて数ヶ月の間に二人、新しくラウンズとなった人間の存在は大きく、ブリタニア帝国の威光をより世界へと知らしめるといふ結果を齎した。

先導するように前を歩く男——ナイトオブセブン、枢木スザク。

羽織るマントカラーは海のように深い蒼。

ブリタニアに対するテロ組織としては最大の規模と組織力を有した『黒の騎士団』を指揮した仮面の魔人、ゼロを捕らえる事で黒の騎士団を壊滅させ被支配層から昇りつめた英雄。

その先に続く全身に包帯を巻いた男はナイトオブツ―、レヴニール・キングスレイ。スザクと意匠を同じくしたマントの色は灰。

黒の騎士団とゼロの影響を受け再び蹶起したエリア18を混濁した指揮系統から独立し、自ら指揮した部隊でテロ組織を壊滅。再平定を成し遂げた麒麟児。

ナイトオブワン以外にラウンズに優劣はないが、先達であるスザクが案内をしていることには当然理由がある。

移動中、スザクが飼っている猫の話や他愛もない話を不器用にレヴニールに振るが、ああ、とかそうか、と短く返すだけで反応は乏しい。

つい先ほど同輩となった男を少し苦手なタイプかもしれないと思ったスザク。

そんな評価を受けている事など知る由もないレヴニールはある人物に呼ばれてこの工廠を訪れていた。

ナイトオブツ―専用ナイトメア開発チームが未だ発足していない中、すぐさま専用KMFを用意できる組織や機関は限られている。

そんな無茶に対応できると手を挙げたのがナイトオブセブンの専用開発チーム『キャメロット』主任のロイド・アスブルンド伯爵。

続いて、私ならばと名乗りを上げたのは有力貴族であるジヴオン家現当主、オイアグロ・ジヴオン。彼の出資するKMF開発企業ならば数日以内にはとの提案があつた。

数日というオイアグロに対抗したのか、ロイドは今すぐにもと周囲が耳を疑いたくなるような発言でレヴニールの心を引き付けた。

ただし、何も今必要となるわけではない為にキャメロットで秘蔵していた機体が合わなければジヴオン家の出資する企業へと一任すること。

そんな条件がロイドとオイアグロの間に交わされ、レヴニールも了承した上でこの場所にいる。

「ここにいてと思うのだけど……」。

「おい、ロイドさん、キングスレイ卿を連れてきましたよー！」

一機のナイトメアフレーム前で脚を止めたスザクが辺りを見渡しながら呼びかける。待ってましたと言わんばかりに、返事は恐ろしく早く返ってきた。

「はいはい！ ご苦労様、スザクくん。」

もう退屈なデスクワークに戻っていいよ。あ、キングスレイ卿は早くこっちに来てね」

ひよつこりとナイトメアのコクピットハッチから出現した顔はレヴニールにとってつい数時間前に知り合ったばかりだ。

スパナを握った左手で一度手招きすると穴へと引っ込む小動物のように再びコクピット内へと戻ってしまう。

旧知の仲とは言えど立場上はラウンズの方が上だろうに…。

枢木スザクが権力を鼻にかけて威張り散らす人間でないことが幸いか。

式典の時といい、本当に奇怪な男だ。

と内心で評価を下した後、レヴニールは少し落ち込んだ様子のスザクへと向き直って小さく頭下げた。

「時間を取らせてすまなかった。ここまでの案内に礼を言う。」

——ありがとう、助かった」

「……意外でした」

「ん、何のことだ」

「あ、いえ…。すいません、キングスレイ卿はなんというか、こう…」

「冷たく見える、か」

スザクの返事はない。むしろそれが肯定という意味だろう。

だが、レヴニールは特に機嫌を損ねたわけでもなく、やはりなと小さく漏らした。

今更気にするのではない。散々言われ慣れていた。

全身を包帯で覆い隠す前、エリア18で志を同じくした戦友たちの第一印象として八割がそう感じるらしい。

何でも無口で無表情、口を開くと飛び出す言動はどこかぶつきらぼうに聞こえるという。

自覚していないということは意図的ではなく、素の状態だ。

ならば直そうとしても、どうすれば判らないのだから仕方がない。

もつと愛想を良くすれば女に不自由することもないと言われ、作った笑顔も不評の嵐だった。

「すいません…。なんか勝手に決めつけてしまつて」

「実際そう見えるのなら仕方ないだろう。おまけにこのような姿なら尚更だ」

肩を竦めてみせる。

こうして会話をする事で誤解が解けるならまだマシだ。

中には一方的に怖がられて近寄りさえしない者もいる。

あまり他人の評価など気にしない性質ではあるが、流石に眼が合っただけで声を上げられたり露骨なまでの反応をされるのは気分がいいものではない。

ありもしない妙な噂を流されるのも困りものだ。

「ちよつとお？ 長つたらしいおしゃべりはもういいから、早く来てくれないかなあ？

こつちの整備はとつくの前に終わつてるからね」

再び顔を出したロイドが眼鏡越しの瞳を不機嫌そうに細めていた。

「あつ、そうだった。じゃあ僕は仕事に戻ります。

……ロイドさんの無茶をあまり聞いちやダメですよ」

「ああ、わかった。

それと、同じラウンズだ。敬語は必要ない、仰々しい呼び方もだ。枢木スザク」

「つ——なんだか思い出すな……」

ふ、と自嘲気味にスザクが笑う。

過去を回想するように、瞳を僅かに落として。

それも一瞬で終わった。

大切な記憶。でも、何処か忌まわしくもある。

スザクの様子にそんな印象を抱く。しかし、無神経に何があつた話してみろと聞いた
りすることはない。

ほぼ初対面の相手にそこまで踏み込むつもりなどレヴニールには無かつた。

今の時代誰しも暗い過去を持っていて当然だ。それもナンバーズ出身となれば尚更
の事。

不幸自慢大会など全く持つて非生産的で互いに惨めになるだけだ。

ナイトオブセブンになるまでに一体何を為したか、何を失い、何を捨てたか……。

それを知るのはいずれ彼が話そうとする時でいい。

「わかつた。じゃあ、僕の事はスザクでいいよ」

「ああ。私の事は……——すまない、愛称の様なものはない。今度考えてきてくれ」

「ネーミングセンスないよ、僕。それでもいいのかい？」

「アーサーなんて格好の良い名前猫を飼っている人間がよく言う」

「あはは、そう言われるとプレッシャーだな……。じゃあ、次に会う時まで」

ああ。短く返すとスザクは踵を返して来た道に戻つていった。

さて、次は……大分お待ちかねだろうな。不機嫌になつていないといいが。

レヴニールが目の前のナイトメアを見上げる。

予想とは反して不機嫌な科学者の姿はそこになかつた。

代わりに現れたのはニタニタと大好きな玩具おもちゃを目の前にした子供の様だが、気味の悪い笑顔。

早く弄り倒したくて仕方がないという様子のロイド。

その期待に答えてやるとするかとレヴニールはコクピットへと続く梯子に手をかけた。

TURN 3 剣と約束

振り翳される悪魔のごとき異形の右腕が蒼の騎士を捕らえようとしていた。

捕まれば最後。敗北は必至——死すら免れない必殺の一撃が込められている。

その右腕が擁する機巧はマイクロ波誘導加熱ハイブリッドシステム・通称『輻射波動機構』。

高周波を短いサイクルで対象物に直接照射することで、発生する膨大な熱量が対象を膨張、爆発し破壊するというもの。

また発生する高周波を展開することで飛来する弾丸やミサイル等を破壊することすら可能である為、盾としての役割も果たす。

——『紅蓮式』

攻防一体のハイブリット兵装を有したナイトメアフレームはそう呼称されていた。

全身を真紅に染め上げたそれは機械であることさえ考慮しなければ正しく、名は人を表すという日本の諺を体現している。

中華連邦インド軍区で開発された後にエリアーにおいて反ブリタニア活動団体の筆頭となった『黒の騎士団』に提供。数々の戦線へと主力として投入された。

その初陣はナリタ攻防戦であることはブリタニア軍人ならば当然の如く知っているだろう。

当時総督であったコーネリア・リ・ブリタニアを後一步まで追い詰め、当時世界で一機のみであった第七世代ナイトメア、ランスロットと互角に渡り合うという結果を黒の騎士団に。

ナンバーズを見下し、反抗勢力など他愛もないと罵り続けたブリタニアには屈辱を齎した。

反抗勢力の主力であったグラスゴーを改修した無頼、鹵獲したブリタニア軍用サザーランドでは比較にならず、当時最新鋭機として親衛隊を始めとしたコーネリア軍に多数配備されていたグロースターをも凌駕していた。

第七世代ナイトメアクラスのマシンポテンシャルを知らしめた紅蓮と搭乗者である黒の騎士団のエースはブリタニア軍を震え上らせた。

——だが、それは以前の話だ。

頭部へと迫った死の一撃を逆方向へと傾いて、ギリギリに回避すると蒼騎士は一気に敵の懐へと肉薄する。

確かに紅蓮の右腕はこれ以上ない脅威だ。

輻射波動機構は当然、鋭利に研がれた爪である指の一本一本とて飾りではなく、凶悪

な外見通りの攻撃力を有している。

しかし、巨大であるが故に独自の間合いがあった。

必殺の輻射波動を叩き込む為にその掌は必ず前へと延ばされる。

加えてクランク伸縮機構により長い間合いを有し、見た目通りの長さに騙され後方へと退避して逃れたと思いきや時既に遅し。

高周波による熱量の洗礼を浴び、自らの敗北を悟ってから判断の誤りに気が付く。

ならば、どう逃れるか。次の攻撃へと繋げる為にはどうするか。

内側に入ってしまった方がいい。輻射波動の攻撃範囲外である右腕の内側に。

その通り、蒼騎士は滑り込むと——すかさず左腕を振り上げる。

異形の腕が一瞬、宙へと舞い……落ちた。

振り上げられた左腕が逆手に握っているのは赤く発光した幅広の剣。

鞘から解き放たれたその刃が紅蓮の腕を切り落としたことは誰が見ても明らかだった。

メーザーバイブレーションソード・高周波振動を利用した斬撃兵装。

ランスロットの装備として初めて実用化された物とは形状こそ違っていたが性能に差異はない。

強固な金属やナイトメアの装甲、紅蓮の右腕であろうとも例外なく、ナイフでバタ-

を切る様に容易く両断する。

最強の武器を失った紅蓮だが、それでも戦えないわけではない。

残された武装は左胸部部に搭載されたスラッシュハーケン・飛燕爪牙と左腕に内蔵式グレネードランチャーと握った小刀と十手を融合させた構造の特殊鍛造合金製小型ナイフ・呂号乙型特斬刀。

終わっていない。まだ負けてはいないのだ。

まずは呂号乙型特斬刀を構えて反撃に転じる——ことは無かった。

腰部から上、ナイトメアの主な戦闘能力はほぼ上半身に集約されている。

索敵の為のファクトスファイア。

アサルトライフルなど火器を操るための腕部マニピレーター。

攻撃及び移動手段として使用されるスラッシュハーケン。

戦闘の要、いや全てと言っても過言ではない。

そのブロックの丸ごと総てが滑るように地へと落ちた。

相対していた蒼騎士の右腕には左と全く同じ形状の斬撃兵装が握られている。

紅蓮の右腕を両断した直後に右腕のMVSで胴を切り裂き、総ての武装を無力化する

ことに成功していた。

反撃の構えへと移られようとする前、既に決着はついていたのだ。

そして、蒼騎士が戦場の汚れを払う騎士の如く剣を振るうと、その動作が合図のよう
に無機質な音声が続いた。

——全敵性機体の撃破を確認。シミュレーションプログラム終了。



「おめでとう〜！　そして、残念でした〜。

キミ、この機体のデヴァイサーの資格アリだね〜。

一応キミの戦闘データを参考にした調整をしておいたんだけど、まさか初搭乗で無頼
五機と月下四機に加えて紅蓮まで倒しちゃうなんて驚いたよ〜」

シミュレーターでの戦闘を終え、コクピットを降りたレヴニールを迎えたのはクネク
ネと腰を左右に振り、抑えの効かない興奮をまるで隠さないロイドだった。

奇妙な踊りにも見えるその動作が喜びを全身で表しているという事だけはなんと
く理解できる。

シミュレーションの内容やロイドの奇行について内心では散々に物申したい気分だったが、それに勝る高揚感がレヴニールを支配していた。

しかし、それをあくまで表には出さず、普段と何も変わらない淡淡とした調子で口を開く。

「シミュレーターだから上手くいっただけです。」

実戦で黒の騎士団がエースの操る紅蓮なら、あの距離まで接近された瞬間に機体をフルスロットルで前進させた後、その勢いで体当たりするくらいは充分有り得る」

「んふー、そうかもしれないけどね。だとしても次の手段は考えてたんでしょ？」

「その場合は後ろに後退しながら、右のMVSを牽制として投擲した後にヴァリスで仕留めます。」

この機体に搭載されたものは通常のヴァリスよりもバレルが短くなっている分早撃ちに優れている、でしよう?」

「んー、まあそれも確かに間違つてはないんだけど、あれの真価はそこじゃあないんだよねえ。」

西部劇のガンマンみたく二挺になったのは偶々で、本当は仕方なくだったんだよ?

……だというのにキミは早々に一挺を捨てたけどね」

若干な不満を漏らすロイドは未だぶつぶつと何かを呟きながら手に持ったノート型

コンピュータ端末を覗む。

数分前までシミュレーターで紅蓮と交戦していた蒼騎士の全体像と素人が目にして
も理解の及ばない専門用語満載の文字群。

内蔵及び懸架された武装一覧、レヴニールのパイロットデータも画面には映つてい
る。

武装覧の一つ、話題に上がっていた銃型兵装の画像をクリックし、詳細情報を拡大表
示するとロイドは端末の画面をレヴニールへと向けた。

Variable Ammunition Repulsion Impact

Spitfire Short Type略してVARSヴァーリス・Sショート。

可変弾薬反発衝撃砲。ランスロットに搭載されていた弾薬の反発力を制御できるラ
イフルを改良、伸縮可変機構はそのままに銃身を短くすることで取り回し安さに特化し
た兵装。

……と、レヴニールは思い込んでいた。詳細なデータが記された端末の画面を見るま
では。

確かに。記載されているスペックが真実ならばロイドが不満を漏らす理由も納得で
きる。

目の前に突き付けられた事実はそれ程に衝撃だったのだろう。

画面を食い入るように凝視するレヴニールの表情をロイドは意地の悪そうな笑顔で眺めていた。

「……凄いですね。この『ランスロット・クラブ』は」

素直に感嘆せざるを得ない。ナイトメアフレームとその開発者にここまで感心することは初めてだった。

興奮冷えぬどころか益々増す気味合いでレヴニールは視線を上へと上げる。

工廠の端という一角に鎮座しながらも圧倒的な存在感を誇る巨人。

——紅蓮を斃した蒼の騎士がそこに在った。

『ランスロット・クラブ』は第七世代ナイトメアの性能を世界へと知らしめたランスロット、その量産計画の一端から生まれた試作実験機である。

外見はランスロットと酷似しているがカラーリングは白と青を基調としており、額には強化ファクトスフィアの役割を担う甲虫のような角が装備されているのが最大の特徴であった。

だが、その姿は以前と比べれば幾分かの違いが見られる。

以前と比べ、僅かに延長された頭部の角は元々の特徴をより強調するが如く存在感を増し、短く丸みのあった両肩部は外側へと延びる形で大型化。

全体的に改修前よりも鋭角的なフォルムとなっていた。

「正式名称は『ランスロット・クラブ・レガリア』です。

元々試作機だったクラブを私とロイドさんの趣味が入り過ぎた改造のせいで、スザクくんですらまともに使えない機体だったのですけど……」

「やるが多すぎるから向いてないって言ってたよね、彼。

あ、こちらの女性はセシルくん、僕の助手」

「またそんな杜撰な紹介の仕方を……」。

こほん。初めまして、キングスレイ卿。キャメロット所属のセシル・クルーミー少佐です」

「レヴニール・キングスレイです。

本日は専用ナイトメアの件でロイド伯爵から提案を頂き、こちらへと参りました」

互いに挨拶を済ませ自然と握手を交わす。

「あ……ご丁寧にありがとうございます」とセシルは一瞬だけ意外そうな表情を見せた後に小さく会釈した。

成程、ロイド伯爵のストッパー兼キャメロットのヒーリング役は彼女か。

敬遠されがちな外見の人間に対しても柔和な笑みを向け、躊躇いなく握手できる人物なら合点がいく。

正反対な同士だからこそ互いを補填し合う良いパートナーとなれるというやつかも

しれない。

実際は技術面以外、ほぼ一方的にセシルがフオローしているというのが隠しようの無い事実であり、出会ったばかりのレヴニールだとしても遠からず思い知るだろう。

「それで、いかがだったでしょう。」

クラブ・レガリアに搭乗してどう感じました?」

「まだ武装を完全に把握していないので現状の感想ですが。」

今まで乗ってきたナイトメアと比べ物にならないくらいに動かしやすかった。…と
思います」

「ああ、セシルくん聞いた? 彼、やっぱり適性あるよ。」

じゃあもう一回シミュレーターに乗ってみよう。今度は僕の指示通りに武装を使つてもらつてさ」

「あんな無茶な戦闘プログラムを始めからやらせておいて何を言ってるんですか…。」

キングスレイ卿だつて人間ですよ? それにお身体の事だつて」

「——いえ、構いません。やらせてもらいます」

気遣うセシルの言葉を遮るようにつきっぱりと言いつつ切った。

あのナイトメアフレームに騎乗した時の高揚感が未だ熱を持って身体を廻り、昂つて
いる。

レヴニール・キングスレイにとってのナイトメアはあくまで今の時代、最も主流と
なっている兵器であるが故に戦争の手段でしかなかった。

己が脳内で思考し弾き出した理想通りの行動を反映しようと操作すれば、数秒のタイ
ムラグが発生する。

たかが数秒と侮る事なかれ。実戦経験のある兵士なら皆理解している自明の理であ
るが、弾丸と爆炎の舞う戦場では数秒が生死を左右するのだ。

自分の反応速度に機体が追従してこないのであれば自らが合わせるしかない。

だからこそ、ナイトメアフレームという人型兵器をあまり信用していなかった。

剣には剣を。銃には銃を。

時代の流れと共に戦場を支配した兵器が今はナイトメアとなっただけの話。

最も戦果を上げたであろうエリア18での決戦も最後は生身の白兵戦。

鍛えた肉体と研ぎ澄ました神経こそ己にとって最大の武器なのだ。

その自負は今でも変わらない。

ただ、一つ心境の変化があったとしたら――。

己の力を最大限に発揮するどころか、増幅してくれる存在に出会ったこと。

出会って数分か数時間か、それくらいの時しか経ていないにも関わらず。

蒼騎士とも呼べる姿のナイトメアの存在が欠かす事ができない程大きくなっていた。

運命の恋人、騎士にとっての愛馬。

様々に呼称できようが一つだけ、間違いないと言えることがある。

レヴニール・キングスレイと戦場を共に駆けるのは——『ランスロット・クラブ・レガリア』

冷たく無機質な格納庫であつても悠然と佇む蒼の騎士。

乗り手の現れない幻の機体と呼ばれたナイトメアフレーム以外、有り得ないということ。



——誰かが呼んでいた。

それは自分の名前なのか、それとも知らない人間のものなのか。

昔、今よりも遙か前にそんな風に呼ばれていた気もするが、よく覚えていない。

ひとりではない。正確な人数を把握しきれない程多く、騒がしい……声。

「様!!」

「様!!」

「様!!」

「様!!」

「様!!」

「様!!」

「様!!」

氣高い騎士を志す若い男が、婚前の輝かしい未来を夢見る妙齡の女が。

農夫の格好をした中年の男と恰幅のいい酒場の女主人が。

顔のしわがれた老父と連れであろう老母が。

喉が張り裂けんばかりに呼んでいる。

おそらくは男であろうその名を。

皆待っているのだ。王たる男が口にする言葉を。

かつては辺境の小国であつたこの国を拡大し、民に様々な益を齎した偉大なる王の号令を。

ならば応えなくては——ならない。

他人事のように思える。だということにそんな感情が沸いた。

沸く所以など微塵も理解できないというのに。

民の声に、民衆の総意に応えるべく命令を下さなくては……ならない。そうしなければ守れないから。

虐げられていた日々々に怯えていた少年はもういない。力を得て変わったのだ。

虐げられることも平伏することもない真の王に。

民には餓える事のない安寧を。

志を持つ騎士には栄光を。

歯向かう敵には死を。

悪行を為した罪人には裁きを。

だから――。

自らの意思ではない。

そんなことを考えてもいないし、思ってもいない。

それでも開かれる口と放たれる王としての勅命を止める事はできなかった。

「――共を――にしろ!!」



最初に見えたのはおぼろげだがやわらかな笑顔。

続いて髪を撫でる優しい掌の感触。

意識は未だ半分ほど覚醒していない。だとしても脳は漠然と機能し、現在の状況を理解しようとしていた。

少し分析してみればなんとなく、そうかもしれないと考えは浮かんだ。

どうやら正解だったようで、後頭部の感じる微かな体温が憶測を決定づけている。

——ああ、自分は女性の膝の上で眠っていた、と。

どうしようもなく、心地よくて。

戦場での目を背けたくなる光景も全て忘れてしまうような安息。

だから、仕方のないことなのかもしれない。

顔も覚えていないのに——そんなことを口走ってしまったのは。

「……は……は……うえ……」

しかし、その安息は――。

「ごめんなさい、私はお母さんじゃないわ」

凜と涼やかな声によって終わりを告げた。

「……………モニカ？」

「おはよう、眠れる森の美少年さん」

冗談か皮肉、あるいは両方か。

入り混じった言葉とまどろみの中で見たものと同じ微笑みがレヴニールを迎えた。

モニカ・クルシェフスキー。同じくナイトオブ라운ズであり、十二の席を担う者。

ナイトオブツリー叙任される前、エリア18からの帰還直後に組まれたブリタニア皇帝
観戦の御前試合で相手となった女性。

……………というのがモニカに対するレヴニールの印象だ。

一体何が、どうなってこのような状況になったのかはまるで理解が出来ていない。

おおよそ今日の予定を回想してみれば恐らくは答えは出るだろう。

ペンドラゴンのホテルで起床後、謁見の間に行く前に着替え……………。

いや、任命式典までは通常通りだった筈。ならばもっと先の話だ。

スザクに連れられてロングミニアドファクトリーのロイド伯爵の下へ。

それから、自分の相棒とも呼べるナイトメアに出会って――。

……思い出した。自分にも責任はあるがロイド伯爵のせいだ。

クラブ・レガリアの武装を一通り使用してシミュレーションを行った後、見せられたランスロットの量産型だという『ヴェインセント』に搭載予定という新型兵器のデータ。

肘に内蔵され、サクラダイトにより発生したエネルギー場であるブレイズ・ルミナスを利用した攻撃から防御まであらゆる使用法が可能な兵器だという。

初めて見るタイプの兵装であるそれを面白いと言ってしまったのが運の尽き。

あらゆるパターン、敵、状況での使用方法を実践することになり、紅蓮や黒い月下と十回以上も戦闘する羽目になった。

セシルの鉄拳制裁によって漸く解放されると、疲れ果てて近場の公園のベンチで横になつていたらそのまま寝てしまったという訳だ。

本日ナイトオブラウンズに任じられたばかりというのに正直、情けない。

「……すまない、モニカ。迷惑を掛けたようだ」

「別に構いません。」

病院帰りに偶々見かけたから、流石に放っておくわけにもいかなかったただですか

ら」

「見かけたって、私をか？」

いくら顔見知りの男がベンチで寝ていたからと言って膝枕をする流れになるだろうか。

そう単純に考えてレヴニールが質問すると、モニカは一瞬間をしかめ呆れたように大きく溜息を吐いた。

「…あなたの財布が盗まれそうになっている現場ですよ」

げっ。思わず声が漏れた。

反射的に腕が財布を忍ばせてあるパンツの左ポケットに触れる。

脚で感じている膨らみからそこに在るのは解っていた筈なのだが、どうしても確認しなくては気が済まなかった。

普段から使っている長財布の感触を知るとほっと胸を撫で下ろした。

「帝国最強の騎士が任命当日に財布を盗まれるなんて、洒落になりませんか？」

もつと自覚を持って、気を引き締めてください」

「……返す言葉もないな。ところでモニカ、一つ聞きのだが」

「む、何ですか。返す言葉もないとか言いつつ本当は言い訳が？」

「いや、言い訳をする気はない。」

が——膝枕をする必要はあったのか？」

何気ない一言にかあつとモニカの表情に恥じらいの色が表れた。

そんなことを言いつつも未だに膝に頭を乗せている青年は全く意にも介した様子はなく、淡々とした調子で何故そこで赤くなる。と、はてなを浮かべていた。

「それは、その……。ほら、あれですよ!!」

あなたと恋人みたいに見られれば、変な輩が近づいてこないと思つたんです」

「それは私にか、それとも君にか？」

「~~~~つ!! どっちだつていいでしょう、もう!!」

はい、サービス期間は終了です。起きてください、ほら」

「わかつたから、無理やりどうかそうとしないでくれ。」

頭から落ちて怪我をしたら危ないだろう」

「知つた事じゃありません!」

怒らせてしまったか。何か失礼なことを言つた自覚は無いのだが…。

持ち前の朴念仁を存分に発揮したレヴニールは少し名残惜しそうに上体を起こす。

ベンチへと座り直して、隣のモニカの様子を伺うと膝の上でぎゅつと両手を握り締め、顔はそつぽを向いてしまつていた。

異性にこのような態度を取られた場合どうすれば正解なのだろうか。

それは恐らく千差万別。女性一人一人によって違うだろう。

レヴニール・キングスレイという男は同性同士の友人関係も無ければ、ましてや異性との交際経験などある筈がない。

自覚はあまりないが自身の女性関係には無頓着と言っても納得されてしまう程である。

それであつても他人を氣遣う心がないという訳ではない。単純に不器用なだけのだ。ならば、この状況で彼が正解を選んだとしても不思議ではない。

「モニカ、詫びと言つてはあまり聞こえがよくないが、受け取つてくれ」
「?」これ、舞台のチケットですか。一体どうしてあなたが」

差し出された二枚の観劇用チケットを手に取り眺めながらモニカ問う。

彼女がレヴニールに抱く印象では少なくとも映画や舞台に心を打たれる事を喜びや趣味として、財布を出すという人間ではない。

もしもそんな男なら失礼かもしれないが意外過ぎるにも程があるというものだ。

「式典に来ていた貴族がスポンサーをしているから是非にと。

まあ半ば押し付けられる形で貰ってしまった。というわけだ」

「ふふつ。やっぱり、そうですね。

あなたの趣味が舞台鑑賞だなんて、全然似合っていないませんし」

「仰せの通りだよ。適当な誰かに渡そうとでも思っていたが、生憎と交友関係が狭くてな」

「…………ふーん、そうですか」

依然としてチケツトを眺めているモニカの心中には未だに刺さった棘のような後悔がある。

少し前の話だ。E・U・から鹵獲した機体を改修した新型機のテストとしてカンボジアへ滞在していた時、一人の青年と出会った。

理不尽な乱暴狼藉を働くブリタニア兵の行動を制止しようとした若い男。

氷のような瞳をして、それでいて内側にどこか危うげな脆さを感じさせる者。

互いに好感を持ち食事の約束を取り付けたのだが、新型ナイトメアの破壊又は奪取を目的とした組織の襲撃によって、モニカは意識不明の重傷を負った。

意識不明のまま移送され、目が覚めた時にはブリタニア本国にある大病院のベッドの上。

不可抗力ではあるが当然、約束の食事をすっぱかすことになってしまい、相手の名前も連絡先も知らない故に謝罪のしようもなかった。

モニカ・クルシエフスキーはラウンズの中でも最年少という訳ではないが、少女と言えるほど年若く、感性も同年代の女性とほぼ変わらない。

同年代の年若い者たちが経験していることを未だ経験していないだけで、自分だって好ましい異性となら関わっていきたいし、恋をしたいという願望もある。

つい勢いでやってしまった節があるが、膝枕だつて一般的な少女たちの恋愛模様に憧れていること。

モニカ自身、帝国最強の騎士とは言えど人であり、女性であることを捨てたつもりは毛頭なかった。

ラウンズであろうと：いや、だからこそ前線に出る機会が多く、一般の軍人と同じく常に死と隣り合わせであることに変わりはない。

戦場で朽ちる事は覚悟の上だが、生きている間に心残りはできるだけ減らしておきたいのだ。

ならば——目の前のチャンスを逃す理由はない。

「では、ありがたく頂きますね。」

そして、あなたに一枚差し上げます。なので私と一緒に観てください」

「いや、私は……。ドロテアやノネットを誘えばいいだろう？」

「勘違いしないで欲しいのですが、あなたには観劇前のシヨッピングにも付き合ってもらいます。」

憂さ晴らしをするように買いますので、荷物持ちが必要なんです。

……膝枕のお礼としてこれくらいいいじゃないですか」

「……そうか、わかった。君に付き合おう」

「え、本当にいいのですか？」

どうしても嫌というのなら別に無理強いはしませんが……」

「いや、一緒に行こう。財布を守ってくれた礼もある。」

それに……君の膝枕は人生で一番心地よく眠れた気がするんだ」

「また、あなたはそんな調子のいいことを言つて……。」

でも、本当……ですか？」

「ああ、嘘を吐く意味がない。それと食事もご馳走させて欲しい。」

当日までに良さそうな店を見つけておくから」

「……つ、約束ですよ。」

破つたら一生、許してあげませんから。……それでもいいのですか？」

ああ。短くそう返すとモニカの右腕をとつて、互いの小指同士を絡ませた。

指切りの約束。確かエリアー、旧日本に古くから存在する大衆の風習。

どうしてそんなものを知っているのか、一体誰に教えて貰ったという記憶はもう覚えていない。

だけど、何かとても大切な……忘れてはいけないう約束をこの方法で誓ったような

……。

「これをどうすればいいのですか？」

突然の行動に放心しているモニカを放っておいてしまったらしく、きよとんとして絡み合った小指を同志を眺めていた。

「……あ、すまない。」

これはエリアーの人間が約束する時のもので、破ったら相手に針を千本吞まされるらしい」

「随分と物騒な風習があるのですねエリアーは。」

——でも、ちよつとだけロマンチックというか…。

存外に、悪くないかもしれませんね」

どこか嬉しそうな表情でモニカは微笑むと小指に力を入れて、より強く絡ませ合った。

T U R N 4 蒼紅の騎士

皇歴2017年。現在、世界は実質三つ大国に分断されている。

テューダー朝期のイングランド王国を源流とした帝政国家『神聖ブリタニア帝国』

E・U・と通称されるヨーロッパとアフリカ、ロシアを領土とし、ドイツやフランスなどのヨーロッパ各国が、構成自治州となり存在する連邦制国家『ユーロピア共和国連合』

そして、中国王朝と大陸を中心とし、島国である日本を除いたアジア諸国、中東一部の国を統合した連邦国家『中華連邦』

歴史書を読めば簡単に調べられる事実であるがE・U・の成立は神聖ブリタニア帝国の発足と深く関わっている。

エリザベス3世の時代、革命の指導者ナポレオンが率いる革命軍にエディンバラへと追い詰められ、王政廃止を迫られていた。

この窮地を救い、女王を含んだ王党派を新大陸への逃亡させることに成功させたのが後の神聖ブリタニア帝国第1代皇帝・リカルド・ヴァン・ブリタニアである。

処女王であったエリザベス3世を最後にテューダー朝の血筋は途絶えるが、女王の遺

言により王位を継承。

帝政を施行し、唯一皇帝となると国号を『神聖ブリタニア帝国』と改め、新たな国家が成立させた。

一方、革命を成功させ英国王室を淘汰し絶対王政を解体したナポレオンは皇帝ナポレオン一世として皇帝に即位するが長くは続かず、帝政に反発する勢力によって処刑される。

これらの歴史を踏まえて、ヨーロッパは以後皇帝も国王もない民主国家となった。3人の大統領を中心とした「四十人委員会」と呼ばれる議会が国家運営・国防を行い、政治家は国民によって選ばれる。

——が、長きに渡って迂拙な人間を有権者にし続けていた結果、民主主義という都合のいい皮を被った衆愚政治へと劣化、変質し現在では大衆迎合主義と利己主義が蔓延している事実が現状であった。

民衆の困窮と国家の腐敗は中華連邦として例外ではなく、権勢欲に溺れた大宦官と呼ばれる八名の官僚集団が元首たる天子に幼い者を祀り上げ、隠れ蓑とし政治を牛耳っている。

私利私欲のために国内で圧政を敷き、まるで大樹を内部から浸食する白蟻が如く蝕み病ませた結果、国力は低下し軍・文・民全ての腐敗が取り返しのつかない段階まで及ん

でいた。

首都洛陽に位置する『朱禁城』は天子の住まう城郭であり、中華連邦の権力を投影したが如き、威容の巨大な居城である。

広大かつ華美なこの城こそ大宦官の専横によって腐敗の温床と化し、内部を食い荒らされた大樹そのものを表していた。

外見だけ取り繕った張りぼての国——国体が既に破綻しているであろう内情を看破した現皇帝が支配する神聖ブリタニア帝国は弱肉強食を是とする。

——世界のパワーバランスにチェックをかける決定的な侵略の一手、その為の先駆は既に向かっていた。



「うおおお……」。

まさかランスロットタイプが二機もだなんて……！　なんとという光景。壮観だあ……」

並び立つ様に配置された紅と蒼、二機のナイトメアフレームの前で感嘆の声が上がった。

透き通った黄土色の瞳を一杯に開き幼子のようにキラキラと輝かせて、対称的なカラーリングのそれらを見上げている。

若干赤みがかかった茶髪の若い男。纏った制服は赤を基調とした軍用であり、所々金色の留め具や飾り紐で装飾されていた。

最も目を惹く左肩にあしらった紋章には箒に乗った魔女が描かれていた。

その軍服は青年の体系に合わせたサイズや細かいデザインなど特注であるが、この場においては別段珍しいという訳ではない。

この格納庫はブリタニア軍対テロリスト遊撃機甲部隊グリンダ騎士団の旗艦・カールレオン級浮遊航空艦『グランベリー』内部。

『重アヴァロン』と呼称されるログレス級浮遊航空艦に比べて多少のスケールダウンは否めないが、カールレオン級こそブリタニア軍艦隊の主力艦である。

KMF運用に十分な広大さを誇る格納庫へ搭載されたナイトメアは一機を除いた全てが赤系統のカラーリングに統一されていた。

「戦場で戦う者は血を浴びる覚悟が必要」

というのはグリンダ騎士団を結成した皇女にしてグランベリー艦長、マリーベル・メ

ル・ブリタニアの方針だ。

それに従い、隊員の制服やナイトメア、旗艦グランベリーまで一式が赤で塗られている。

当然、赤い軍服の青年——レオンハルト・シユタイナーもグリーンダ騎士団の一員であり、ナイトメアを操り戦場を駆ける騎士であった。

「うん、確かに。紅が隣に在るからこそ、蒼も映えまた逆も然り。というやつかな。

でも、いいのかい？ 技術系貴族であるシユタイナー家のご息が他所のナイトメアを褒めたりなんかして」

「それとこれとは別の話ですよ、テインク。

カッコいいものはカッコいいのですから仕方ないですって」

それもそうだね。そう短く返すのはテインク・ロックハート。

岩^{ロックハート}心の苗字に似合う巨漢で、年齢こそレオンハルトと同じだが顔立ちは大人びて見える。

細かなデザインこそ違うが同じく赤の服を纏う彼も同じくグリーンダ騎士団所属の騎士であった。

共に18という若い年頃であったが、専用機を任される程に優秀な騎士であり、グリーンダ騎士団の活躍を支える重要な一柱である。

「それに、このカラーリングはちょっと思い入れがあるんですよ」

懐かしむ様な口調でレオンハルトがぼつりと云ちる。

テインクが言ったが、レオンハルトの生家であるシュタイナー家はナイトオブスリーの専用開発機関としてシュタイナー・コンツェルンを運営している技術系の貴族であった。

マリーベルに目をかけている第二皇子シュナイゼルの根回しもあるが、故に彼の搭乘する機体はナイトオブスリー専用ナイトメアの試作機である。

名は『ブラッドフォード』今でこそグリーンダ騎士団のシンボルカラーに合わせたオレンジ系の塗装が施されているが、ロールアウト前にレオンハルトが見た時は白と青系統に塗られていた。

視線の先に鎮座したナイトメアはレオンハルトの記憶を回想させるような装いをしていた。

「——気になるのか？」

「うおっ!？」

今日に背後からかけられた声に驚かされたのはレオンハルトだけでなく、テインクまでが珍しくその場から飛び退くように振り向いた。

くすんだ灰色のような銀の髪に磨かれたサファイアの如き蒼の瞳。

足先から口元までの全身を包帯で覆い隠した姿。

肩に羽織った灰色の外套を自らの象徴とした男は赤の軍服がデフォルトであるグランベリー内において、嫌でも目立つ。

一度見ただけで一生忘れる事のないだろう異様な出で立ちだが、それを抜きにしても帝国最強の騎士団にて第二席を担う者である事実は艦内に知れ渡っていた。

ナイトオブツ、レヴニール・キングスレイ。

蒼と白に塗られたランスロットタイプのナイトメア——『ランスロット・クラブ・レガリア』のデヴァイサーであった。

「す、すいません、キングスレイ卿。」

自分是对テロリスト遊撃機甲部隊グリンダ騎士団所属レオンハルト・シユタイナーであります」

「お、同じく、グリンダ騎士団所属のティンク・ロックハートです」

あたふたと慌てた様子を見せた後、急に畏まってびしりと敬礼をする二人の心拍は異常なまでに上昇していた。

彼らの所属するグリンダ騎士団を乗せたグランベリーは現在、中華連邦へと向かって
いる。

つい先日、第二皇子シユナイゼルを皇帝の代理とし、中華連邦とブリタニア帝国

の友誼を図るための布石となる交渉が決定した。

だが、これはあくまで表向き。皇帝の真意は中華連邦を政治的に侵略する好機を看破し、宰相であるシュナイゼルを大宦官との密談のテーブルに送り込んだのである。

その護衛任務を与えられたのがカールレオン級浮遊航空艦とナイトオブラウンズ専用機の試作型を有したグリーンダ騎士団。

そして、ナイトオブツイーであるレヴニール・キングスレイであった。

本来はグリーンダ騎士団のみでの任務となる手筈だったが、皇帝シャルルは他国へ最も新しいラウンズを披露するという理由で本国よりナイトオブツイーを同行させる事とした。

当然、名目上での話である。

その真意はナイトオブツイーを衆目に晒し、帝国最強騎士団の席がまた一つ埋まった事実を突きつけ、中華連邦を含んだ他国への牽制とする為だ。

加えるならばレヴニールが最も戦果を上げたエリア18は中華連邦領土に近く、周辺国にその異名は知れ渡っている。

『ブリタニアの幽鬼』

誰が名付けたのか不明だが、総督府への攻撃作戦が成功した後に急激に広まったとあるブリタニア兵の噂だ。

相對した時、何度斃したと確信させたか。

だが、實際は斃れておらずどれだけの傷を身体に刻もうと敵を斃すまで止まらない人の男。

真正面の直撃コースで撃ち出した弾丸が、まるですり抜けているように躲された。

何の気配もなく背後へと忍び寄られ、氣絶させられていたことにすら気が付かなかった。

等々、噂は様々で実際にはあり得ない様な事まで広まっているが、それらは戦場でレヴニールと敵対し生き残った兵士が伝えている。

ブリタニア側はそれを利用して、大宦官との交渉を円滑に進めようという算段なのだ。

そして、他国に広まれば自国に広まるというのは自明の理である。

どころか、広まるにつれ尾鰭が付いて回る事も当然といえばそうなのだがもはや人間ではなく、本当に幽霊なのではないかとまで言われていた。

原因はテレビに出演していた高名な学者が冗談のつもりで、真面目なフリをしながら口から漏らした発言である。

学者自信、自らの影響力と情報社会に生まれた現代の若者を甘く見た結果として、噂に更に拍車がかかったというのは当然であった。

レオンハルトとティンクも噂を耳にして影響を受けた若者たちの一人である。

勿論、軍人である以上あまりにも信憑性のない話は真に受けなかった。

——が、当の本人を目の前にしてみると「あの噂って実は本当なのでは……」と思わせる何処か現実味のない風体と亡霊のように希薄な雰囲気醸している。

何せ人外の集団とまで言われているナイトオブラウンズだ。

凡人では一生辿り着くことのない境地へと至った者たちに一般的な常識は通用しないと言つても間違いいではない。

「……何を緊張しているか知らないが、別に小言を言うつもりはない。

それより、先ほども聞いたが、このクラブが気になるのか？」

「——え？ あ、はい。

同じランスロットタイプとは言つても、オズ：オールドリンのグレイルとは結構な違いがあるものですから」

成程、とレオンハルトの言葉に相槌を打つ。レヴニールの視線は既にクラブからその隣、紅に染め上げられ金の装飾が施されたナイトメア——『ランスロット・グレイル』へと移っていた。

いくつか造られたランスロットの予備パーツで組み上げられたという点ではランスロット・クラブとその起源を同じくする機体であるが、並んでいる様を見れば違いは一目瞭然である。

グレイルの最もな特徴であろう左右に大きく広がった背面のマントは「ソードラック」と呼ばれ、内側に計12本の剣型兵装が規則正しく並んで装備されていた。

『シユロッター鋼ソード』と呼ばれるこの試作兵器は名の通り、ブレイズルミナスのエネルギー停滞を可能とし、かつ超硬度を両立した特殊合金『シユロッター鋼合金』で構成されている。

腕部ユニットに固定し、ブレイズルミナスを纏わせる事で切断力を高めた刺突武器『ソードブレイザー』とラックからワイヤーで繋がれた2本のソードをスラツシユハーケンとして射出する『ソードハーケン』の役割を担っていた。

近距離から中距離に対応したマルチウエポン。グレイルにとっては戦闘の要にして最大の携行武器であり、同時にそこから乗り手の得意とする戦闘傾向が理解できる。

製作者であるロイド伯爵がデヴァイサーである人物のデータを分析し機体へと反映した結果、この『ランスロット・グレイル』が完成したのだろう。

「グレイルは近接戦闘に特化した機体か。」

確かにクラブとはコンセプトからして違う。この機体、搭乗者の名は？」

「オズ———オールドリン・ジヴオンという女性です。」

我らグリンダ騎士団の筆頭騎士ナイト・オブ・ナイトを務めています」

「……オールドリン・ジヴオン、か」

思い当たる節でもあるのか、レヴニールの眩きには疑問の色が混じっていた。

ジヴオン家は広大な領地や莫大な財を抱えているという訳ではない為、有力とは言い難いがブリタニア帝国に古くから存在し、時代の皇帝へと仕えてきた貴族の家系である。

ラウンズを輩出した時代もあり、歴代当主は二刀を扱うジヴオン流剣術を駆使する騎士として、その実力はナイトオブラウンズにも劣らないと云われていた。

加えて、現当主オイアグロ・ジヴオンは次世代ナイトメアを開発する企業に出資することで近年の表舞台へと台頭しつつあり、ナイトオブツ―任命式典にも出席していた。

世事には疎く、興味のある事柄以外にはとことんまで関心がないと自負しているレヴニールでもその家名には心当たりがあった。

「あー、そうだ、宜しければ中華連邦に到着したら彼女をデートにでも誘ってみてはどうですか？

観光する時間くらいはあるでしょうし、まだ若いのに男の気配が全く無いのが同僚としては心配でござっ！」

「な・に・失礼な事を言ってるんですか、テインクツ!!」

あの、気にしないでくださいね、キングスレイ卿。ただの冗談ですから、本当に！」
自分より体格の勝る男を制止するべく行動したレオンハルトの額には汗が浮かびな

がらも必死の表情で、これ以上何か言わせまいと口を抑えつけている。

一方のティンクは若干、呼吸が苦しげな様子ではあるがまだ何かを言いたげにふがふと空気を吐き出し続けていた。

仲の良い兄弟のじゃれ合いのようにも見える二人の様子を一頻り眺めるとレヴニールは思案を止め、唐突に口を開いた。

「——いや、前向きに検討しよう。」

個人的に聞きたいこともある。早速、探してみよう。では、また後に」

独り言のようにそう言い残し、レヴニールは格納庫の出口へと向かって行った。

噂に聞いていたイメージと何処か違う後姿を見送る二人は揉みくちやに絡まったまま顔を見合わせる。

互いに素つ頓狂な表情であったがあまり気にはならなかった。

何故なら相手の表情を確認するよりも先に反射というべき行動へと移っていたのだ。寸分違わない、全く同じタイミングで同時に二人は声を上げた。

「「え、えええええええつ!?!」」

TURN 5 矛盾

「ぜえ〜つたいイケメンですよ、あの人！」

何の脈絡もなく、唐突に叫んだ声の主に視線が集中した。

現在、グランベリーは中華連邦側の手続き不備により、領内東部の威海衛に寄港している。

グランベリー内の一室に集結した三人の少女はグリーンダ騎士団戦略顧問であるヨハン・シュバルツァー將軍の指示により、36時間の半舷休息が与えられたばかりであった。

叫び声の主はツインテールの髪型が特徴的な少女、エリシア・マルコーア。

軍属前はアイドルという異色の経歴ということもあつてか明るい性格であり、グランベリーでは戦略オペレーターを勤めている。

グリーンダ騎士団に所属しているが騎士には遠く、感性は同世代の少女と変わらない故の俗っぽさが、彼女の長所であり前線での戦が多いグリーンダ騎士団においてはその存在自体一種の癒しとなっていた。

「え、エリシアたん？ それって全身包帯の……ナイトオブツゥ様？」

「はい！ だって、少しくせのある銀髪に蒼い瞳…それに顔を隠すための包帯マスケですよ？」

もう少女漫画の王子様属性でんこ盛りじゃないですかあ」

「うーん、ソキアちゃんにはちよつとよくわからん世界だにやー…」

半ば引き気味に返すのはエリシアと同じく同年代に見える少女、ソキア・シエルパ。

元競技KMFリーグのスタープレイヤーであり、かつてはスポーツ用品メーカーで専属モデルを務めていた。

明朗闊達で表裏のない社交的な性格でエリシアと同じくグリーンダ騎士団のムードメーカーとも言える存在だ。

しかし、意外な一面として戦闘においてはKMFリーグでの経験から、高度な戦略と情報分析能力を持った騎士であり情報分析など電子戦を視野に入れたKMFに搭乗している。

加えてブリタニア帝立大学の電子工学修士号まで取得しているのだから、人は見かけによらない。それは正に彼女の事と言えるだろう。

「ちよつと不気味な雰囲気だし、もしかしたらすつごいブサイクってこともあり得るかもよー？」

「えーっ！ 酷いですよ、ソキアさん。」

全国の乙女たちが噂してゐるんですよ、新しいナイトオブツゥ様は不思議の国から来た王子様かもしれないって！」

「うくん、それはちよつと妄想が過ぎると思うんだにやー。」

それに私はそういう王子系よりもオデュッセウス殿下みたいなのが好みだしー。

あ、オズはどう思う？ ナイトオブツゥ様のこと」

「え、どう思うって言われても……。」

美形かどうかはさておき、騎士としては尊敬できる方だと思うわ」

オズ——そう呼ばれた三人目の少女が答える。

オルドリン・ジヴオン。グリンダ騎士団の筆頭騎士ナイト・オブ・ナイトであり、皇女マリーベルが最も信

を置く騎士。

若く実戦経験も浅いが努力家で、ラウンズを輩出したこともあるジヴオン家の血筋からKMFの操縦に長け、特に近接格闘戦は目を見張るものがある。

キヤメロットから贈られた『ランスロット・グレイル』は彼女の特性に合わせてチューンされた機体であり、戦場においての愛馬であった。

「いくら無能だったとはいえ、司令官の指揮下から独立して反抗勢力を制圧するなんて普通の騎士では有り得ないわ。

それにキングスレイ卿の指揮下に入ったのは皆、私たちと同じくらいの年齢で実戦経

験の浅い騎士だったそうじゃない」

同じランスロットタイプのデヴァイサーでもある、とあえてオルドリンは加えなかった。

心の底でどこか彼に対して微かに芽生えつつある羨望と対抗心に似た感情を悟られまいとする為だった。

ランスロット量産計画においていくつかの部隊に試験型ランスロットが配備された事実はオルドリンも知っている。

自ら搭乗するグレイルもグリンダ騎士団が計画の為に受領した機体だ。

しかし、多数配備された量産試作機『ランスロット・トリアル』とは違い、グレイルはオルドリン専用調整された所謂専用機である。

強大な国力と軍事力を有するブリタニア帝国においても専用ナイトメアを扱うことを許された騎士は特例を除き、帝国最強の騎士団ナイトオブラウンス以外有り得ない。

グリンダ騎士団は特例の一つであり、ランスロットタイプとラウンス専用機の試作型を保有している。

これは創設者であるマリーベルに関心を寄せる異母兄、第二皇子シュナイゼルの手回しによるものが大きい。

言い方は悪いが、最新鋭のナイトメアフレームを自分たちの実力で勝ち取ったという

訳ではないのだ。

それを理解しているが故、未だ己の実力不足を思い知らされる。

レヴニール・キングスレイは何も始めから専用機を与えられていたわけではない。

『ランスロット・クラブ・レガリア』と称される蒼い機体を受領したのはつい先日、初陣も経ていないという。

そして、グラスゴーやサザーランドといった一般的な量産型ナイトメアを駆り、多大な功績を残した記録は確かなものとして残っている。

比較対象としてラウンズでありランスロットタイプオリジナル、Z-01・ランスロットのデヴァイサーからナイトオブセブンとなった枢木スザクなら話は少し違う。

彼の場合はナンバーズにして初騎乗のナイトメアがランスロットであったという異例であり、故・ユーフエミア皇女と親しくその専任騎士となった。

あらゆる点で比較してみると、スザクとオールドリンは共通点が多い。

もしも、枢木スザクがエリアーでランスロットに乗っていなければ今の地位は無かったかもしれない、というのがオールドリンの見解だ。

勿論、己も皇女マリーベルと幼馴染でなければ今の地位に就いているのは別の人間であった可能性は高いと予想している。

つまるところ、ブリタニア帝国において絶大な権力を有する皇族とロイド・アスプル

ンドという異色過ぎる科学者に見出された自分たちは運が良かったのだろう。

ナイトオブツーにとってある意味幸運なのはエリアー8での指揮官が無能だったと本来なら運の悪い事この上ない状況だ。

絶望的なまでの状況を好転させ、自らの功績に繋げる。それだけの機転が利く対応力はこのオールドリンには無い。

レヴニール・キングスレイはあらゆる点で尊敬に値する現状の目標だが、同時に己の未熟さを実感させられる存在として対抗心を抱きつつあった。

そんな事を考えているとまるで見計らったかのようなタイミングで扉が開き、噂の中心人物が登場した。

「——失礼する。ジヴオン卿はこちらに……。ああ、居るみたいだな」

「ありやー、これはもしや噂をすればなんとやらというやつかにやー！」

「？ 一体何の話だ」

「あー、それはその…何と言いますか…。ねえ？」

入室して早々いぶかしげな表情のレヴニールに対してばつが悪そうにソキアは視線を逸らした。

ソキアから助けを求められるような目線を向けられたエリシアも言葉はなく、ただ無理だとアピールするようにぶんぶんと首を横に振る。

「ほぼ初対面の上官へと馬鹿正直に「貴方の容姿について話していました」と答えられる程の度胸を生憎二人は持ち合わせていなかった。

しかもソキアは冗談のつもりでも不敬罪で処罰されても可笑しくはない発言をしている。

ならば仕方がない。この場合は筆頭騎士である自分が何とかするしかないだろう。貧乏くじを引かされたと溜息を一つ吐き、オールドリンは口を開いた。

「それより自分に何かご用でしょうか、キングスレイ卿」
 「む、ああ。そうだった。

突然ですまないが、ジヴオン卿はこの後の予定は空いているだろうか？

良ければ共に繁華街を周らないかと誘いに来たのだが」

「えっと、この後は彼女たちと一緒に「いえいえ、全然オズは暇ですとも！」……ちよつと、一体何よ！」

「いいから、いーから。」

一緒に行つてきなさいな。……というか行つてきてくださいお願いします！」

「わ、わたしからもお願いします！」

話に割り込んできたかと思えば急に手と頭を床へと……所謂土下座で拝みこむソキアと何故かそれに釣られるエリシア。

若干どころではない。明らかに不自然な二人の態度から良からぬ企みがあることは明白だった。

「はーん、わかつたぞ、こやつらめ。オールドリンは素顔の裏に狡猾な表情を造つた。予想するに二人は大方、包帯の下の素顔を自分に探らせようとしてもしているのだから。」

（普段あんまり賢くないからどうせバレないとも思つたのでしようけど、まだまだ甘いわね！）

その陰謀暴いたり！そう豪語する様子こそ見せなかつたが、内心ではどやりと得意げに勝ち誇つた。

ならば知つていながらも指摘をしない慈悲深い筆頭騎士オールドリン様は敢えて部下の策謀に乗つてやろう。

加えるなら、ナイトオブブラウンズと話せる貴重な機会でもある。きつと何か得られるものがある筈だ。

「彼女らもこう言っている事ですし、喜んでお供させていただきます。」

「待ち合わせは甲板で宜しいでしょうか？」

「ああ、それで構わない。なら、私は先に待っているとしよう」

騒がせたな。ぼそり陳謝を述べて去つたレヴニールをオールドリンは見送つた。

直後、背中に何だかもぞ痒いような……何とも言えない気配を感じて、振り返るとニタニタ気味の悪い笑みを浮かべた女二人組の視線に晒された。

「な、なによ。気持ちの悪い顔しちやって……」

「いやー、ついにオズにも春が来たのかと思うと感慨深くてさあ……」

「私、お二人のこと応援してるですうー！」

王子様と二人きりのデート、頑張ってくださいね！」

当事者を置いてけぼりに意気揚々としている二人だが、オールドリンには正直意味が解らなかつた。

一体何をそんなに興奮することがあるのか。自分たちの思惑通りに事が運んで喜ばしいのなら理解できるが、どうやらそういう訳でもないらしい。

いつにもなく時間をかけて思考してみる。記憶を数刻前にまで戻してみると一つだけ、引っ掛かる部分が存在した。

ん、さつきエリシアは何て言った？ 聞き間違いじゃないなら確か……。

「……………ほえ、デート……………」

その眩きが自分のものだと理解することに数秒を要した。

それくらいに間抜けで、気の抜けた声が反射的にオールドリンの口から漏れていた。



人々の流れが辺りで最も盛況な通りにオルドリントンとレヴニールは訪れていた。

まず二人の鼻腔を擦ったのは中華料理に多く使用されているであろう辛味の強い刺激的な香辛料の匂い。

中華連邦特有の装束に身を包んだ商人たちが切り盛りしている屋台には唐辛子の色を濃く反映した料理が並び、それらに舌鼓を打つ観光客の様子が窺える。

腕のいい料理人によって調理された食品の見栄えこそ良いが砂の路上へと雑に店を構えている為、衛生環境は劣悪の一言。

だからこそ、口にしてもいけないのに嗅覚を刺す刺激的な香りの次に強く嗅ぎ取れたのは当然、腐臭であった。

少しばかり注意深く観察してみれば店の裏手に大量の生ゴミが積み重ねられている光景がまるで普通であるかのように多々見られる。

実際、一步路地を外れてみれば貧困街——スラムが広がっており、様々な事情を抱えその場所での生活を余儀なくされた人民は少なくない。

ブリタニア帝国もスラム街を抱える国ではあるが、第一皇子オデュッセウスが執り行うボランティアや社会復帰を促す労働プログラムの存在が貧民の生活を支えている。

引き合いに中華連邦の行政は貧民対策を全くせず、納税の義務を怠った者はただ切り捨てられ、その日暮らしもままならない現状を強いられていた。

現状への不満こそあるもののそれを打開しようとする反骨的な気概は見えず、地べたに座り込む覇気の無い住人たちからは諦めの感情が読み取れた。

(二)アト……。なんて、言える雰囲気じゃないわよね)

異性との個人的な付き合いがほぼ皆無なせい、出発前こそ妙に意識してしまいオルドリンはいつにもなく浮き足立っていた。

自分では彼女の騎士マリベールとなると誓ったあの日から、少女であることよりも騎士である事を選び現在に至っている。

だからといって、同年代の少女が体験しているだろう日常に対する憧れが完全に無いとは言いつい切れなかった。

しかし、自分たちが任務で訪れている国の内情をまるで詠えたように目の当たりにしては流石に気が滅入ってしまう。

自分を連れ出した当の本人：レヴニール・キングスレイは周辺の情報を仕入れると言いつい残し、オルドリンから僅かに距離を離して道端に寄ると、壁に寄り掛かって脚遊びを

する十代前半に見える地元の少女に声をかけ何やら聞き込みをしていた。

純心ゆえの恐れ知らずか、話を聞かれた少女は全身包帯という異様な姿を目にしても気にすることは無く、いくつかの質問に丁寧に対応していた。

レヴニールも腰を落として相手と視線の高さを合わせている。強烈な第一印象からは意外な姿に思え、興味深く眺めていると幼子の扱いに慣れている様子がそれとなく解った。

話し終えたのか、礼を述べ折り畳まれた紙幣を握らせるとレヴニールは少女を解放した。

雑踏の中心へと駆けて行きながら振り返って、大きく手を振る少女にレヴニールは小さく返す。

大人が中心となる人の群れに紛れ、やがて少女は見えなくなった。

「結構優しいのですね、キングスレイ卿って」

ほんの数分前よりもずっと好ましく見える背に声を掛ける。

冷ややかで人を寄せ付けない氷のような第一印象とは大きく違い、深い包容力と温かみのある海のような人だとオールドリンは内心評価を変えた。

自分の事という訳ではない癖にどうしてか善行の直後みたく嬉しくなり、鬱屈した心持も晴れやかに戻りつつあった。

だが、微笑むオルドリンとは対称に当人であるレヴニールの表情は晴れない。

むしろ上陸する前の方が冷ややかに見える分、覇気が感じられる様子をしていた。

「——ジヴォン卿。先程の少女だが、両親は既に亡くなっているらしい。」

今は一人で生活している。：つまり、孤児だ」

父親は徴兵され、出兵した先で戦死。

母親はそんな夫の顛末に耐え切れなくなり精神が摩耗、流行病を発症して病死した。

引き取ってくれる親戚もおらず、外国人観光客からの施しで日々を繋ぐ生活。

教師が授業の補足するように淡々と憫然たる事実をレヴニールは独り言のように語る。

思い返せば確かに顔や服は砂の汚れと色落ちが目立ち、財布すら持っている様子はなく、少女の暮らしが裕福ではないと容易に想像できた。

だが、そこまで侘しい境遇だとは実際にレヴニールが話すまで頭に浮かびもしなかっただろう。

だって、さつきあんなにも笑顔で、元氣一杯に手を振って……！！
「相手に憐みの感情を持たせて強請る。」

そんな物乞いの常套手段かもしれないが、些末な事だろう」

養われる事が当たり前の人間が逆の立場に属している。

あの少女に限った話ではない。辺りを少し見渡せば年齢も近く似た風体の幼子たちは当たり前存在していた。

本来は有りない状況を隠そうともせず、日常の一部にしているのは行政及び国家そのものだ。

長期に渡る大宦官による腐敗の影響、人民にまで広がったその闇は身近と思える程に深く浸透している。

温かさを取り戻しつつあった心の熱が引いていく感覚。

心臓へ尖った氷柱を突き立てられたかの如き錯覚がオルドリンを襲っていた。

「もしかしたら、あの少女は駆けて行った先で、金を得た場面を目撃した者に狙われるかもしれない。

お世辞にも治安がいいとは言えないこの辺りだ。可能性としては充分にあり得る。

目の前でなら犯罪を止める事はできるだろう。だが、自らの与り知らぬ所なら話は別だ。

私は……そこまでの責任を取ることはできない」

——それは杞憂だ。とは返せなかった。

オルドリン自身、中華連邦という国の内情は数時間足らずで嫌という程理解させられた。

それだけにレヴニールの仮定話を無為に否定はできない。

「それでも君は——私を優しいと思うか？」

何処か哲学めいた雰囲気のはそれは誰かに対しての言葉というより、自らに言い聞かせている。

その姿を例えるなら己を戒めている罪人だ。

少女の消えた雑踏へと向けられた瞳はその場所を映しておらず、ずっと遠く……過去を回想しているようにも思える。

思いがけないレヴニールの問いに、オールドリンは返す言葉に詰まった。恐らく、その答えに完全な正解はないのだろう。

レヴニールの行動は立派な善意とも捉えられるが、彼の語る先の顛末を予想すれば偽善とも考えられる。

だが、それを偽善としてしまえばもはや本当の優しさなど存在しない。

民衆にまで腐敗の広がったこの国みたく、世は闇だということを肯定してしまう。

あの日、彼女の心を守る為に自分が吐いた嘘も本当は只の自己満足でしかなかったと——。

「……すまない。意地の悪いことを言ってしまった、忘れてくれ。」

それよりも、この先の店に美味しい小籠包が——」

言い終える前に近傍で発生した爆音がレヴニールの言葉を遮った。

空へ向かつて放たれたなら花火と言えるが、それは地面に着弾し炸裂している。

一度だけではない。二度三度、続けて何処とも知れない場所を狙い砲弾は放たれ続けていた。

被害から逃れようとする人々の波に流されまいと咄嗟にレヴニールはオルドリンの腕を掴み、引き寄せると共に近隣にあつた石造りの家屋へと退避した。

幸い、家の中に住人は居なかつたがもう一つの懸念が残る。

間近で目にした威力から察するに例え石造りの頑丈な建物であろうと耐えられて一発程度が限界だろうと二人は予想していた。

「小籠包はまた今度だ、ジヴオン卿。」

今は最優先としてこの状況を乗り切る。グランベリーとの通信は可能か？」

「今、やっています。…あ、繋がりました！」

こちらオルドリン、グリーンベリーより状況確認と救援を要請します。

——はい、了解しました。レオンハルトとティンクさんが既にナイトメアで救援に向かつているそうです！」

恙なく終了した通信にレヴニールは拍子抜けしていた。

これだけの規模で勃発した破壊行為の癖に電波妨害装置によるジャミングが発生し

ていない。

ともすればこの無差別攻撃は事前に計画されたものではなく、突発的な暴走と判断でききる。

目的は恐らく、グランベリーが威海衛に寄港した事ではつきりとしたブリタニア帝国と大宦官の密談の阻止だろう。

自らの護身が最も重要な大宦官達が元首たる天子と国家そのものを取引材料するくらい、散々圧制を強いられ続けた民ならば予想できて当然だ。

『オズ、キングスレイ卿！ 遅くなって申し訳ありません。今すぐこちらへ！』

テインク、防御はお願いします！』

『勿論、しっかりやってるよ！』

機械越したが、聞き覚えのある声に二人が向くと家屋の入り口へ手を差し伸べるKM Fが見えた。

ブラッドフォード。レオンハルト・シユタイナーが搭乗するオレンジ系統に塗られた細身の機体。

もう一機、似たカラーリングだが対称的に重厚なフォルムのナイトメアがブラッドフォードの背に立っていた。

ゼットランド。砲撃から二人を守る役割を担い、機体を前面に展開したブレイズルミ

ナスのシールドで覆っている。

機動性を犠牲にした代償として鉄壁の防御を誇り、何度も砲撃の直撃を食らっているがゼットランドは微動だにせず、機体とその周辺には一切の被害がない。

その性能に絶大な信を置き、搭乗するティンク・ロックハートは顔色一つ変えず、オールドリンとレヴニールの回収作業を終了まで見守った。

『保護完了しました。これより、グランベリーへ一時帰投します。』

ティンク、帰りも後ろは頼みました』

『うん、任せて。二人と君の機体には傷一つ付けさせないよ』

二人の人間を掌に乗せたブラッドフォードが飛び立ち、ゼットランドはその背に続く。

振り落とされぬようナイトメアの指を強く掴み、オールドリンは振り返ると各地で火の手が上がった街並みを見下ろしてた。

街を民を救えるのは我々しかない。力を持つ者が弱き者を守るために力を振るわぬ理由はない。

軍人が命を守ろうと戦うのは間違っていない。だが、その過程で人の命を奪うのも軍人なのだ。

貴族であり、騎士たらんとするオールドリンだが、優しさの定義と同じくその矛盾に明

確な答えを出す事は出来ない。

だが、一つだけ明確になつてゐる信条に一切の迷いはなかつた。

ただ、単純に。愚直なまでに真つ直ぐ。

目の前で無惨に消えていく命の価値に差を付ける事は無く、誰であろうと救いたい。そう願う想いだけはきつと——間違つていない筈だから。

TURN 6 ピースマーク

達観、若しくは諦観している。

他者がレヴニール・キングスレイを評する場合によく用いられる言葉だ。

どこか遠いところから世界を見下ろし、俯瞰しているような雰囲気を漂わせる人間だと関わりの薄い者には認識されている。

別段レヴニール自身が意図的にそう振舞っているわけではない。本質的にただ不器用なだけなのだ。

実際、接してみれば第一印象とは全く違うと評価を覆す人間の方が圧倒的に多く、現ラウンズであるナイトオブセブン、ナイトオブトゥエルブもその中に入っている。

本質を即座に理解したのはモニカの後に御前試合で戦い、引き分けたナイトオブナインくらいだろう。

ただ、冷淡に見られがちな雰囲気を漂わせる所以ははつきりと自覚していた。

場所、時間、そして世界。

そこには確かに己が存在している筈だ。

だが、その実感が限りなく希薄に思える。

ある種の虚無感とも言えるだろうか。

別に世界を嫌っているとか、現状への不満故の逃避という訳ではない。

死への誘惑は自我が抵抗しがたい衝動であるとする学者は提唱したが、それに当てはまるという事でもなかった。

単純に兎に角、現在を生きているという当たり前に対して思考が疑問符が付ける。

何処とも知れない遠くから頭に響かせて来るのだ。

『何故、此処にいる——？』

その度、律儀に返すが言葉は決まっている。

『知った事じゃない』

関係の無いやつが勝手に他人の人生に首を突っ込むなど。

瞳を閉じると聞こえてくる声にぶつきらぼうに返す。

煩わしい姿も見せないで一方的に何様のつもりだ。

悪夢から目を覚ますように瞼を開く。

目下は戦場と化し、己は起動既にしたランスロット・クラブのコクピットで操縦桿を握っていた。

戦地へ赴く為に心持を入れ替える。通信が入ったのはほぼ同時だった。

『すまないね、キングスレイ卿。』

皇帝陛下直属の君に難しい役割を押し付ける事になってしまった」

ランスロット・クラブのモニターに映ったのは、この場において最も権力を有する人物。

帝国宰相にして第二皇子。皇帝に最も近い男、シュナイゼル・エル・ブリタニア。

レヴニールは目が合うと自然にさっと姿勢を正した。

「いえ、そもそも自分がこの場に存在すること自体が異例なのです。

少々予想外でしたが、クラブに初陣の機会を与えて下さった感謝こそあれど、不満な
どありません」

『そう言ってくれると私も気が休まるよ。』

それと、感謝なら私よりもマリーへとお願ひするよ』

穏やかな笑みを浮かべたシュナイゼルが画面から外れ、替わりに現れたのはまだ年端も行かぬ少女。

愛らしい外見をしており、若く美しい女性士官の多いグリンダ騎士団の中でも一際目を惹く。

シュナイゼルの異母妹、つまり神聖ブリタニア帝国皇女にして「グリンダ騎士団」団長兼「グランベリー」艦長、マリーベル・メル・ブリタニア。

帝国で最も高貴な血を引く事実をまるでその容姿が裏付けている様にも感じられた。

だが、高貴で温和な姿は鳴りを潜め、眼差しは鋭く毅然とした態度で状況を指揮する相貌となっていた。

『キングスレイ卿。作戦概要を確認します。』

当艦はランスロット・クラブ発艦後、一時洋上へ退避。

宰相閣下の安全が確保された後、中華連邦軍との挟撃にて敵を殲滅。

キングスレイ卿にはグランベリー退避までの陽動及び露払いを任せます』

「イエス、ユア・ハイネス」

『指名手配中のピースマークが中華領に潜伏しているとの情報もあります。』

この騒ぎに乗じて宰相閣下暗殺を企てる可能性もあるでしょう。

それを踏まえ、現場での判断は貴公に一任します』

『ピースマーク』その単語を口にして以降、マリーベルの語気が僅かに強くなったのは錯覚ではない。

世界各地の反ブリタニア思想のテロ組織を含む様々な組織やE・U・の様な反ブリタニア各国から依頼を受け、所属チームで依頼行為を遂行する傭兵派遣会社が「ピースマーク」と呼ばれている。

実質のテロリスト支援及び派遣組織であり、世界中にネットワークを持つ強大な組織力を有し、指導者は不明瞭でブリタニアの諜報機関を以てしても実態を掴むには至って

いない。

黒の騎士団で運用された紅蓮式と同型の第七世代ナイトメアフレームまで保有しているという意味でも、各国に点在するテロ組織とは一線を画している。

過去の経緯からテロリストへの憎しみが強く、対テロリスト遊撃機甲部隊であるグリンダ騎士団組織にまで行つたマリールには許し難い組織。

テロ殲滅を何よりも優先する方針から、むしろ暗殺計画を実行して欲しいと危険な考えすらマリールには浮かびつつあつた。

ラウンズであるレヴニール・キングスレイとランスロット・クラブであればピースマークの第七世代KMFと交戦したとしても遅れを取ることは無い。

加えてナイトオブラウンズは皇帝直属であつて皇族には然程関わりはなく、戦死したとしてもマリールとグリンダ騎士団への影響はほぼ皆無。

それらの打算合つてマリールは能力を試すように柔軟な対応能力を必要とされる仕事をレヴニールに任せただ。

マリールの性質こそ知らないが、レヴニールはそれとなく作戦の裏に隠された打算には気が付いていた。

レヴニールが己の意図を理解してこの作戦を了承した事はマリールも承知している。

互いに食えない人間だと心中で呟くのは殆ど同時だった。やはり考えていることは同じだろうと察しながら表には出さずマリールはにこりと、とびっきりの笑顔を作ってみせた。

『ブリタニアの幽鬼とその愛馬の力、存分に見させて貰います。期待していますよ』

「クラブの性能はともかく、私自身の能力には過度の期待はしないようお願いします」

——心にも無い事を。微笑みながら呟いてマリールは通信を切った。

それは貴女とて同じだろう。その言葉は口に出さず喉元に留め、飲み下す。

初めからこちらに等期待はしていないだろう。むしろ目の上の瘤くらいに考えているかもしれない。

特に因縁があるわけでもないが、レヴニールはマリールと良好な関係が築けるとは思えなかった。

それはきつとマリールも同じだろう。生理的に無理という表現は少し低俗だがそれしか適正なものがない。

『グランベリー、ポイント到達まで残り三十秒。ランスロット・クラブは発艦用意を』
オペレーターのアナウンスに我に返ったレヴニールは操縦桿を握り直す。

初陣を飾るには少し物足りなかつたら、許してくれ。囁き、すつと正面を見据えた。

「……MEピースト——」

『十、九、八、七、六、五、四、三……』

コアルミナスが風を切るが如き音で唸り、全身の駆動部へと熱を注いでいく。

グランベリーのカタパルトデッキ上で蒼騎士の脚部が左右に滑り、身を低く沈めた。

『ランスロット・クラブ、発艦どうぞぞ！』

「——発艦！」

既に戦場と化した威海衛へと飛び出した一つの影は夜空を切り裂く彗星の如く。

王権^{レガリア}の証の名を冠する蒼き騎士がその姿を現した。



ランスロット・クラブ・レガリアの周囲は屍山血河となっていた。

無作為に次々と出現する標的を悉く破壊していく様は傍から見ればもはや蹂躪と称されても可笑しくはない有様だ。

擦れ違う度に斃れていく中華連邦のKMFである鋼^{ガン}體^{トル}の性能はブリタニア軍のサ

ザーランドには及ばず、精々グラスゴー程度。

だというのにサザーランドなど寄せ付けられない機動力で圧倒されるのだからそもそも単機では勝負にもなっていない。

だから、物量で押し切るといなのが自明の理。生産コスト故に配備数は圧倒的に多く、隊列を組んで一斉射撃を行った場合の火力自体は侮れない。

——だが、その圧倒的な物量差を以てしてもスクラップとなった非人型が山のように積まれていくだけで、蒼き騎士を討伐するには至らない。

既に二十機以上を屠った蒼き騎士の進行する先には六機の鋼體が待ち構え、正面へと火力を集中し行く手を塞いでいた。

それでも蒼騎士——ランスロット・クラブ・レガリアは意にも介さず、その進行は止まらない。

オリジナルのランスロットには一步及ばないものの、クラブ・レガリアの運動性能は現行のナイトメアフレームではトップクラスに入る。

その性能を生かし、地を這う様な動作で砲撃を正面から回避していく。

無茶とも見えるが、敵の弱点とクラブの防衛兵装を考慮に入れた上での行動である。

鋼體の武装は全て固定式のマシンガンとキャノンである故に自由度に難点があり、直撃コースだとしてもクラブの腕部にはブレイズルミナスのシールドで防ぐことが可能だ。

付け加えるなら、隊列を組んだとしても攻撃対象が回避したら総ての機体はその方向へと向かねばならない。そして、訓練された部隊とはいえどKMFを操るのは人間である。

指揮官の指示通りに八割近くの機体が同じ動作をしたとしても僅かな乱れが生じる場合がある。本来なら見咎められることもない本場に僅かな乱れ。

だが、クラブを操るレヴニールはその乱れを隙として捉え、逃さない。隊列の乱れた一角をVARISS・Sで撃ち抜き、陣形を崩す。

一機減り計五機となった鋼體の部隊は六機編成の戦略を破棄し、即座に次の陣形へと移るために動いた。

正面の一機が距離を離し、クラブの側面を囲うように四機が展開する。この陣形が完成した時点で正面の鋼體に搭乗していた部隊長は勝利を確信した。

四方からの同時攻撃に加えて正面には退路を塞ぐ自分がいる。背後へと逃れようと鋼體四機が正面へと即座に向き直るのは容易い。

しかし、信じられないことが起きた。包囲の中心となつてゐるクラブから射出される四基のスラッシュハーケン。

それだけなら持てる全てのスラッシュハーケンを撃ち出した——ただ、それだけのことだ。

問題はそれらの軌道だった。放たれたハーケンが弾丸の如く宙を奔り、鋼體のバイタルパートを的確に貫いた。

当然、回避行動をとった四機全て漏らすこと無く。誘導弾を連想させる軌道でハーケンは射出後に方向転換したのだ。

『ば、馬鹿な!?——がつ!』

有り得ない現実を目の当たりにした部隊長が驚愕する事と撃破されたのは同時だった。

クラブの両手には赤い刀身の剣、MVSが握られている。包囲した全機を破壊すると真正面へと急速接近し、加速の勢いと二刀を以て斬り裂いたのだ。

「——ふう……。少し危なかったな」

息を吐いて気を落ち着かせる。

包囲を敷かれた時、クラブ・レガリアでなければやられていた可能性も状況的には大いに有り得た。

一瞬の間に鋼體を解体したのはレヴニールのパイロットとしての腕だが、包囲網を容易く突破できたのは機体性能に頼るものが大きい。

スラッシュハーケンの自動追尾機能オートホーミング。通称ハーケンブースターと呼ばれる機構と量子演算システムによる高精度な行動予測を併用した一芸だ。

レガリアへと改修前のクラブには強化ファクトスファイアが搭載されていたが、より高度な演算能力を持つ電子解析装置へとアップグレードされている。

索敵だけに留まらない機能を考えればファクトスファイアより第六世代ナイトメアフレームとして開発され、後にゼロによって鹵獲された実験機ガウエインに備わっていた『ドルイドシステム』に近い。

高すぎる性能故に一般的な人間には却って扱いきれないドルイドシステムや機能を限定化する事で扱いやすくしたウアテスシステムには及ばないものの、電子戦に特化しているわけでもない機体としては充分過ぎて余る代物。

それでも使いこなすには適性が必要となり、ナイトオブセブンである枢木スザクが自分には向いていないとの発言はシステムとの相性悪さ故だ。

改めてリーダーを確認する。索敵範囲内の敵性を示す赤い点は全て消えていた。つまり、辺り一帯の鋼體は掃討したといえる。

グランベリーも既に洋上へと退避している頃だと考え、レヴニールは通信回線を開いた。

「こちらランスロット・クラブ。これよりグリーンダ騎士団の援護に——っ！」

咄嗟に操縦桿を傾け、クラブが左方向に遮蔽物の多い位置へと飛び退く。

反射、直感。動物的な本能とも言うべき感覚が思考より先に身体を動かしていた。

論理的には説明できない行動に従ったことは結果として正しかった。

次の瞬間には、風を切り裂き奔る一発がクラブが先程までいた空間へと駆け抜けていったのだから。

「——AP弾か！」

弾丸が通り抜けた先、石造りの建造物には見事な風穴が空いていた。

装弾筒付翼安定徹甲弾。APFSDSと呼ばれる貫通力に特化した砲弾であると予想するのは容易かった。

サザーランド等に装備されたアサルトライフルでは威力が足らず、鋼體の固定式キャノンの榴弾では着弾時に炸裂してしまう。

彫刻のように一瞬で削り取る芸当はタングステン合金くらいに強固な弾芯でしか有り得ない。

数秒間、過剰なエナジー消費には目を瞑り、レヴニールはクラブの索敵範囲を拡大した。

数倍まで跳ね上がった索敵能力によつて友軍機の反応がぼつぼつと浮かび上がる中、レーダーに一点の赤い光が燈る。

——見つけた。必殺の一撃を放った狙撃手はクラブから離れた先の十一時の方向に存在していた。

ランドスピナーとハーケンを駆使し、競技用ナイトメアと遜色ない立体的な軌道を魅せながらクラブは最短ルートで肉薄した。

驚異的なスピードであり、多角的に動く機体には無闇に狙っても当たらない。

狙撃手もそれを承知しているのか、牽制程度の軽い砲撃のみを繰り返しAPFSDS等の強力な兵器は温存している。

残り数メートルまで到達するとクラブは左腕のMVSを鞘へと納め、腰部からヴァリスを引き抜いた。

其方が撃たなくともこちらは遠慮なく使わせてもらう。と瓦礫に隠れた敵機へ狙いを定める。

壁越しの標的へと向けられた銃身が上下に展開、銃口を含んだ内部パーツが伸び終えると――撃った。

バーストモード。最大出力で放たれた光弾は牽制弾を消し飛ばして尚止まらず、狙撃手が壁としていた巨大な瓦礫を粉微塵に粉碎した。

直撃ならば要塞として壊滅させる一撃。だが、威力に対し手応えは薄い。

着弾する刹那、直撃地点から飛び退く影があった。

クラブの正面へと着地した影。己を確実に狙っていた狙撃手が姿を現すとレヴニールは目を見開いた。

全体のフォルムは殆ど、というよりも完全に見覚えがある。以前シミュレーターで交戦した紅蓮式式そのもの。

相違点は全体のカラーリングは白を基調とし、頭部にはクラブと同じく甲虫の如き一本角が煌めいている。

そして、輻射波動機構とは違う巨大な右腕を有していた。

コンテナを括り付けた様に見える異形の腕から戦車砲に似た砲身が突出しており、狙撃に用いられた武装である事は明白だった。

黒の騎士団以外に紅蓮型のナイトメアフレームを運用した記録がある組織。ならば当て嵌まるのはただ一つ。

「……ピースマーク」

予想外の遭遇に一層気が張り詰める。

第七世代相当のナイトメアフレームと戦場での相対はレヴニールには初めての経験だ。

油断、遠慮。元より一切有り得ないがその感情がより強くなる。

白い紅蓮型はコンテナへと砲身を折り畳み、収納すると大型の銃にも見える刃を展開した。

物質を切断する際、銃が閉じる様に上下の刃が一つに重なりと大型のブレードへ変わ

り、クラブへと向けられる。

対するクラブは左腕のヴァリスを腰部へマウント。MVSを抜刀し、二刀を構えた。二機の一本角が向かい合う。開戦への秒読みは既に始まっていた。